

墓群群群群穴
横穴穴穴穴横
廻横横横尻
奥松谷谷谷谷
イタ池池池池
タ池池池池
マ小池狗ノ
小天池
小天池
マ小天滝

2010年3月

奥出雲町教育委員会

例　　言

1. 本書は奥出雲町教育委員会が行った、諸開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果報告書である。
2. 本書は2篇に分けて構成し、前篇には近年調査の遺構、後篇にはより以前に調査の資料集成録とした。各遺構と調査年次は次のようである。

前篇　マタイ廻（またいざこ）横穴墓	平成18年調査
後篇　小池（こいけ）横穴群	平成2年調査
小池奥（こいけおく）横穴群	平成元年調査
天狗松（てんぐまつ）横穴群	昭和62・平成元年調査
滝ノ谷尻（たきのたにじり）横穴群	平成元年調査

3. 描図中の方位は原則として調査時の磁方位で示す。地形図は各工事図面等による。
4. 調査体制等はそれぞれ内扉に記した。

5. 本書は奥出雲町教育委員会の下に、杉原清一・藤原友子が編集・浄書し、井上賢治・藤原厚子・栗原久美子が補佐した。

目 次

マタイ廻横穴墓

I 調査に至る経緯	3
II 位置と環境	3
III 調査方法と成果	5
調査方法　　遺構　　埋葬状況　　転移した残存骨について　　埋葬順序　　遺物	
IV 総括	12
付編 マタイ廻横穴墓出土人骨	13

小池横穴群

I 遺跡の環境と調査に至る経緯	27
II 遺構の概要	27
1号墳丘　　2号墳丘	
III まとめ	30

小池奥横穴群

I 遺跡の環境と調査に至る経緯	32
II 遺構の概要	32
A区　　B区　　C区	
III まとめ	41

天狗松横穴群

I 調査に至る経緯	43
I支群　　II支群　　III支群	
II まとめ	47

滝ノ谷尻横穴

I 遺跡の環境と調査に至る経緯	48
II 遺構の概要	48
横穴のプランについて　　人骨について　　副葬品について	
III まとめ	49

付編 I 横田町小池横穴群出土人骨	50
II 横田町小池奥横穴群出土人骨	57

マタイ廻横穴墓

奥出雲町亀嵩2565-41・山林（旧小字名マタイ廻）

発 見	平成18年11月15日
調 査	平成18年11月21～27日
調査主体	奥出雲町教育委員会
調査指導	勝部智明（島根県教育庁文化財課）
調 査 者	杉原清一（担当）・藤原友子・佐野木信義・家熊猛・井上賢治・野津旭
人骨鑑定	井上晃孝（前鳥取大学医学部法医学）
調査協力	（有）日野碎石仁多工場

I 調査に至る経緯

この横穴墓の発見は平成18年11月15日、(有)日野採石仁多工場が行っている上砂採取の現場において、重機操作業のオペレーターが尾根頂部付近で掘削法面に空洞部分があることに気付き、作業を中止して、即刻奥出雲町教育委員会に通報された。町教育委員会は直ちに現地に赴き、横穴墓遺構であることを確認した。

遺構は工事中の切崖面で地山土に亀裂もあり、崩土の積もった玄室部分のみが残存かと思われるなどの状況から早急な対応が必要と判断し、県教育文化財課と連絡をとりながら準備のうえ速やかに調査を行うこととした。

現地調査の作業は11月21日～11月27日までで、次のようにある。

- 11月15日（水） 午後工事中発見、横穴墓1基確認
16・17日 調査器材・事務関係の準備
20日（月） 調査開始予定なるも雨天のため延期す
21日（火） 現地調査開始 崩落土除去 地形測図（平板） 雨よけシート張り
人骨残存確認 井上先生に人骨鑑定を電話で依頼
22日（水） 玄室床面を検出 人骨3体配置を確認 地点の座標測量
玄室内詳細測図 腹道及び羨門部破損消滅を確認
23日（木） 祝日なれど作業 人骨取上げの作業図等準備
人骨取上げ現地作業を27日（月）と協議決定
24日（金） 遺構実測 記録写真
27日（月） 人骨調査取上げ 玄室床面精査 器材撤収 調査終了
28・29日 今後工事掘削予定地内についての分布調査（踏査を中心として）
近くの約70m以内には無しと判断

II 位置と環境

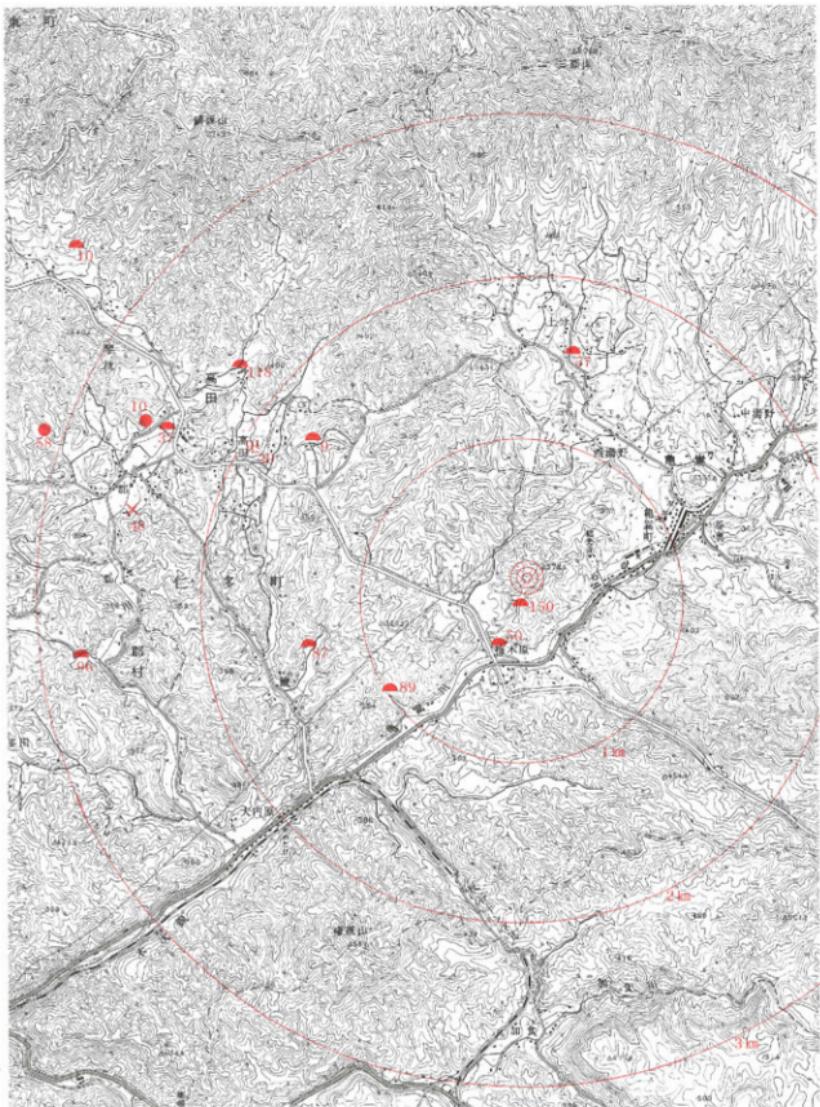
この横穴墓は奥出雲町亀嵩の中心町並から国道432号を南西へ約900mの亀嵩川を挟んだ北側の高い尾根上に位置し、古代仁多郡衙の比定地から南東へ大仁農道と国道との交点辺りが広く眼下に展開している。

所在地点は奥出雲町亀嵩2564-41（旧小字名マタイ廻・山林）で国土座標第III系X=-86.532m、Y=82.447m 標高372mの尾根上の高まるところである。

この付近の遺跡としては、同じ尾根上で南西135m離れたほどんど同様の地形地点で上砂採掘工事で発見され、調査後消滅した大トシ谷横穴墓があった。またその南麓には横穴式石室を主体とする直径10mの梅木原古墳が占くから知られている。南西約1kmの尾根上にはほぼ同様の円墳である大原山古墳が存在する。

北西2.5kmあたりには古代仁多郡衙比定地で、古墳時代後期以降平安期に至る遺跡が多く分布する。此所から当該遺跡の限界を経て南東への大仁農道沿いは「山雲国風土記」に記するところの阿志鬼縁の割を経て伯耆国への通路であったと思われるところであり、それに伴う集落も点在していたと想像される。

附近に分布する遺跡を図及び表に示す次のようである。



これら古墳時代～律令期の遺跡を一覧すると次のようである。

地区	遺跡No	遺跡名	種別	概要	文献等
梅木原	50	梅木原古墳	古墳	横穴式石室、古く開口し出土品不明、径約10m	⑦
	89	大原山古墳	古墳	横穴式石室、石室一部残存、径約10m	⑦
龜嵩	57	上分中山横穴墓群	横穴墓	1～3号穴は概ね三角テント形の玄室で妻入り様式、道路工事で破損	⑥
高田・郡	9	岩星古墳	古墳	円墳径約20m、横穴式石室全長6.9m 仁多郡最大規模	⑦
	37	常楽寺古墳	古墳	横穴式石室のみ残存、人物・馬・円筒埴輪出土、推定円墳径約16m	①
	96	コフケ横穴	横穴	1穴、三角テント妻入り型、須恵器Ⅲ期、人骨2体男女、男足骨に切削あり	②
	118	玄藏坊横穴	横穴	1穴、膨らみのある三角テント妻入り型、人骨2体男女、集骨状、須恵Ⅳ期	⑥
	10	琴枕岩星古墳	古墳	円墳径20m弱、横穴式石室、袖無し型、現長4.7m、前方破損	⑦
高田・郡	48	仁多郡家址比定地	官衙	地名による比定地	③
	58	カネツキ免遺跡	散布地	遺物溜まり、円面鏡、転用鏡、墨書き土器、木俑など出土	④
	101	芝原遺跡	散布地・生産	7～8世紀の鍛冶跡、墨書き土器、陶馬など	⑤
	29	高田廐守址	寺院	瓦等出土、礎石1枚残存	③
	87	金床横穴	横穴	1穴、消滅、須恵器蓋坏1組、平瓶1IV期、耳環（金）1対出土	⑦
	150	大トシ谷横穴墓	横穴墓	玄室のみ残存、三角テント型妻入り型、人骨3体男1女2、耳環、刀子、（♂）は木棺か、須恵器Ⅲ～IV期	⑥

（須恵器年代観は山本編年による）

文 献

- ① 杉原『常楽寺古墳』1985 仁多町教育委員会
- ② 杉原・井上「仁多コフケ横穴」・「同出土人骨の概要」『島根県埋蔵文化財調査報告書XVII集』1992 島根県教育委員会
- ③ 『仁多郡誌』大正7年 仁多郡役所
- ④ 運闘・西尾「カネツキ免遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書X I集』昭和60年 島根県教育委員会
- ⑤ 杉原『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』1994 仁多町教育委員会
- ⑥ 杉原『大トシ谷横穴墓・他』2005 仁多町教育委員会
- ⑦ その他、調査時管見又は町教育委員会所管の遺跡台帳による

III 調査方法と成果

1 調査方法

発見時の状況は、岸面の空洞に崩落土が1m近く積もり、破断面の一部で地山土が水平に見え、それにそって細かい樹根が膜状に這うのが部分的に観察され、またその面に須恵器の蓋坏2個体の破断面が見えていて、これが造構底面であることが判断された。

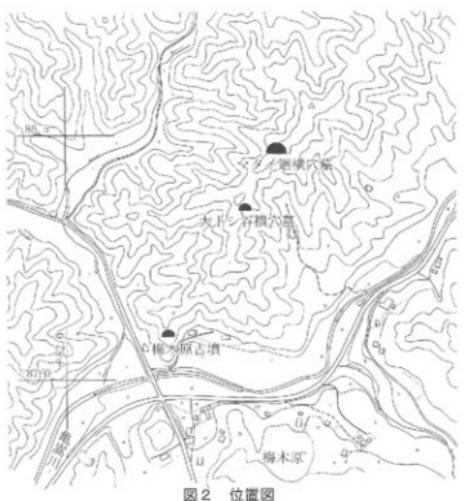


図2 位置図

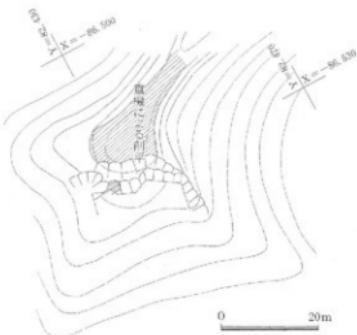


図3 地形復元図

この面を手がかりに遺物の埋没を想定し工事挖乱による崩落土を床面約30cm上を目途に排土し、それによって残存遺構部分を知ることとした。その結果、残存遺構は主軸を西とする玄室床面の大部と破損した奥壁及び北側壁の奥側約半分で、

床面も廻門に近いあたりから前方は羨道部分すべてを含み削除消滅していた。天井部もそのほとんどが剥落して原形はほとんど残っていないかった。

次に、遺物等の埋没位置を予想しながら足元に注意し薄皮剥ぎのように排土作業を繰り返してほぼ埋葬配置と人骨3体の遺存を確認し、床面に至る精掘を行った。

一方、約100m離れた尾根最高所の三角点を基準に、遺構位置の座標・標高を求め、遺構周辺の地形測量を併行して行った。

遺構検出作業は、直上の丘頂（深さ約1mほどの削平を受けた面上）に仮基準杭を設け、これに沿って記録しながら進めた。そして座標値はこの基準杭点を示すこととした。

2 遺構

1) 残存遺構

玄室の主軸方向は正しく西を指し、深く急峻な谷奥の頂点にある。頂上の尾根の高まりは工事により若干削平されているが復元的に見ると玄室床面は頂部から約6.5m下がったレベルに造られている。そしてこの尾根上の高まりには周溝などは確認出来なかった。後背墳丘に見たてたものであったろう。原形を保ち残っている部分は玄室の床面の部分であり、廻門部から前方は消滅している。

玄室の規模はわずかに奥行きの長い歪な扁丸方形で、向かって右（南）側は直線で推定170～180cm、向かって左（北）はやや長く約200cmで、胴張り気味。幅は奥壁部で180cm中央やや手前で最も広く195cmである。また床面は奥端から玄門方向へかけて緩やかに下り勾配であり、中軸でその落差は13cmほどであった。横断方向ではいずれも中央が3～4cm低く、通路部か排水を考慮したことであろうか。

2) 類似プランの事例について

残存する玄室の床面のプランについて近隣地での類似例を挙げてみる。

特徴として左壁部が大きく張り出して奥へも深く、入口側壁端ラインも丸みをもって左袖部をつくっている。これ

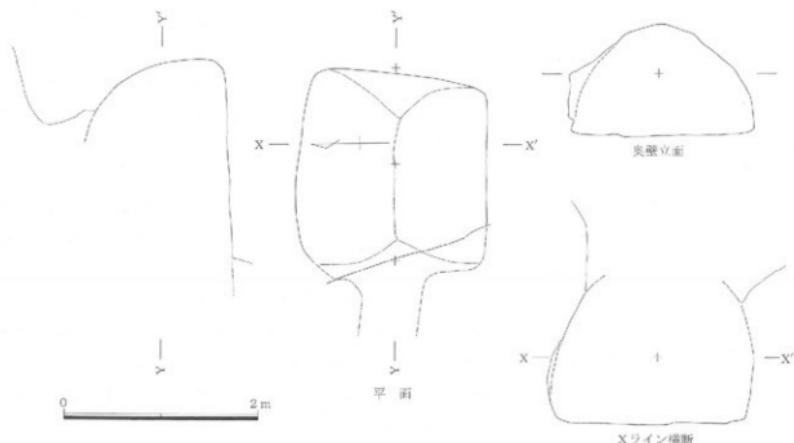


図4 マタイ廻横穴墓実測図

に対し右壁部は直線で短く、従って奥壁は主軸に直交せず左に深く右に浅いプランである。仁多郡内を主にして玄室床面の類似プランを挙げると次のようである。

- 1 大トシ谷横穴墓^{⑨11}・・・・・本事例と同じ山陵上で約130mの距離に所在
- 2 宮ノ峰横穴墓^{⑨12}・・・・・横田・角地区所在
- 3 小池奥10号横穴墓^{⑨13}・・・・・中村・鎌免地区所在
- 4 足子谷横穴墓^{⑨14}・・・・・安来市広瀬町西北田所在
- 5 小池奥8号横穴墓^{⑨15}・・・・・(3と同じ群)

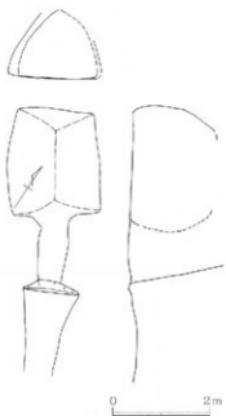


図5 大トシ谷横穴墓

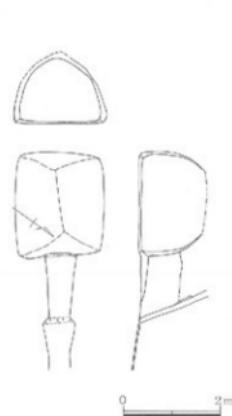


図6 角・宮ノ峰横穴墓

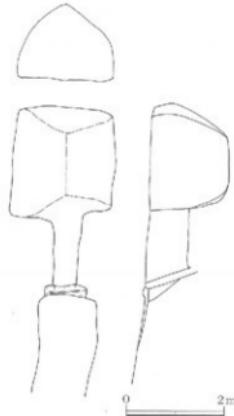


図7 小池奥10号横穴墓

事例 1 大トシ谷横穴墓は、当該横穴墓と同じ尾根上130m地点に所在した、いずれも群をなさない単独墓である。主軸方向は南東であり当該遺構の面に対してほぼ逆である。

玄室床面プランで見ると、奥壁約7cm広いことと左壁前端隅角部が丸味をもたないことでそれ以外は全く同形同寸であり、しかも尾根上の高まりからの落差5.5~6mも同様である。同一人のほぼ同一時期に掘削加工をしたものと見ても違和感がないほどそっくりである。被葬者は各3名であるが、その配置は異なる。しかし伴う土器は蓋坏で、いずれもTK43併行である。

事例 2 宮ノ峠横穴墓は、南東約4km離れた山陵上で横田盆地を一望する斐伊川本流域の地点にあり、群をなさず単独墓である。床面プランの比較では奥壁幅で約10cm狭く左側壁の膨らみは約20cm少なく、前方隅角部は鈍角気味の角をなして、床面は正方形に近い。

北東を主軸にするこの玄室には被葬者は女性2名で供歎や転用枕の須恵器はTK43併行である。

事例 3 小池奥10号横穴墓は、南東約3.9kmで上記した宮ノ峠横穴墓から約500mの同様な立地である。南南西を主軸とする床面プランは同様に左奥がやや深く、左側に拡大するもので幅・奥行きとともに当該墓の場合とほとんど同じである。しかし、左側壁は直線的で尖及び手前の隅角部は丸味がなくシャープである。被葬者は左側で1人以上、土器は玄室内に壺身1で、前には6個体があった。土器様式は上記2件より新しくTK209併行である。

事例 4 足子谷横穴墓は、北東約7.5km安来市広瀬町西北田に所在するが、古代に於いては当該墓と同じ「仁多郡三虎跡」に属するところである。立地は丘陵下端に近い低位で玄室の主軸はほとんど南である。玄室床面は同様に左側が奥、手前ともに深くして広い。しかし当該墓に比し幅が60cm、奥行きは約40cmほども広く左側壁は膨らみをつくる特大のプランである。四隅部はシャープな角をなし、右側は段差を付した削出しの削床を作っている。被葬者は男性3、女性1、子供4の合計8名である。須恵器はTK209併行とみられる。

事例 5 小池奥8号横穴墓は、上記事例3に挙げた小池奥10号横穴墓の近くにあるが、支群を異にしている。

玄室プランが、当該墓や上記した事例1~3の場合を左右全く逆転したもので、床面幅や奥行きなどはほとんど同寸法である事例である。なお床面中央には縦に排水溝が造られていることは、当地に数少ない例でもある。土器年代は、TK209併行とみられる。

なお壁面は、剥離崩落が著しくはつきりしないが床面の削り出し加工も粗であった。側壁の状況は、明確ではないが直線的でなく向かって左側は大きく膨らみ、また奥壁は大きく弧状に前傾している。棟線については不明。

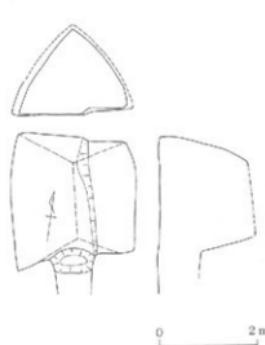


図8 足子谷横穴墓

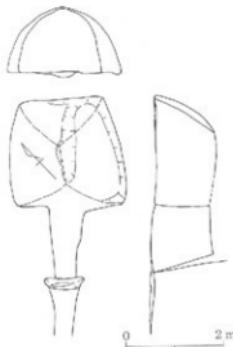


図9 小池奥8号横穴墓

3 埋葬状況

玄室中央に幅約70cmほどの広い空隔をとり、向かって右（南）側に埋葬人骨1体が、左（北）側には頭位を奥にした1体と入口側を頭位とした1体の2体が一部重ね合わせ状に、いずれも仰臥伸展位状に安置されていた。この各人を次のように1～3号人と呼ぶこととした。

左侧 入口を頭位とした人・・・・・ 1号人 (男性)

〃 頭を頭位とした人・・・・・ 2号人 (女性)

右側 入口を頭位とした人・・・・・ 3号人 (男性)

人骨については、井上先生により調査が行われ取上げは、3号人、1号人、2号人の順で進められた。

以下にその概況を記す。

3号人

右側壁沿いに須恵器壺1組を伏せて並べて枕とし、足端を奥に仰臥伸展位となっている。

上半身はほとんど消滅し、薄く膠質物状の暗色部分となって遺体位置が判断される。下肢骨はそれぞれ端部が消失しているものの骨部の長管部分は太く明確に残っていた。足端部は朽ちているが一部は残存していた。

身長は、現場で土器枕から足端部までの距離で概ね150cm以上とみられた。3号人は成人域の男性ではあるが年齢は不詳。身長は骨部位の計測から157～159cmと推定された。

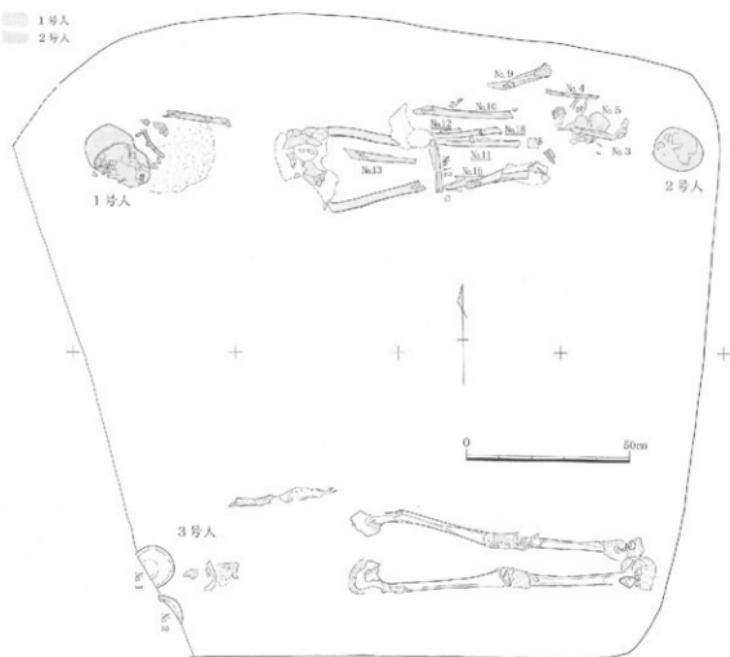


図10 玄室内実測図

1号人

左側壁沿いに、入口側を頭位に足端を奥にして、下肢の一部を2号人骨の上に置くところもある仰臥伸展位である。床面への敷き砂は顯著ではなく意識的な敷き砂は行っていないようだ。

但し、入口に近い頸位附近はのちの流入土との区別が難しく、頸骨は下顎が咬合状態のまま斜め内側に傾いていることから頸位保たるために砂土を寄せた可能性もある。

胸～腹部あたりはほとんど消失し、右上腕骨片など散片は大きく移動転位しているが、下肢部はほぼ原位置に部分的ながら遺存している。

鑑定の結果は50年後期の男性で、身長は156～158cmと推定された。

2号人

奥壁左端近くに頭骨があり、左側壁に近く奥から1mあたりまでは主として四肢の長管骨片がある。また1号人骨の足端部から奥の頭骨まで約35cmの範囲には細片化した骨片がやや集積状にあり、肋骨片等も見られた。また、これより前方では1号人の脛骨・足骨等の下や並びに、2号人の脛骨や大腿骨の長管部分が遠位が逆転して遺存した。このような配置状況は自然位のままではなく、集積状況と言えよう。

2号人骨の鑑定によると壮年期の女性であり、身長の推定は不可能とされた。

また頭位附近から採取した離歯には龋齒が認められた。

なお、この2号人骨は軽して半ば砂土中に混在する様相で検出されていて、敷砂の有無や埋葬時の原位置は明確ではないが、上体部はほぼ原位置でありその上に集積され、また頭骨はほぼ原位置から後方へ反転して前頭部が奥壁に接した状況とみられる。

以上の状況からすると当初の埋葬は左奥壁側を頭位として入口側に伸展する仰臥位であったと思われる。

4 移転した残存骨について

検出した骨格の配置について鑑定結果によると自然位置ではなく、移動していた骨は次のようである。

2号人骨	寛骨破片 (No.5)	2号人胸郭部あたりの床面近くへ
	上腕骨左 (No.3)	2号人胸郭部あたりの上面遠位逆転
	脛骨 左 (No.15)	2号人左大腿部附近床面遠位逆転
	大腿骨右 (No.9)	2号人右 " 砂上に高く遠位逆転
	" 左 (No.10)	2号人右 " 附近 遠位逆転
	脛骨右か (No.13)	2号人ほぼ正常位 (1号人股間) 遠位逆転
	尺骨 右 (No.12)	1号人膝上に横位
1号人骨	上腕骨右か (No.11)	1号人左脛骨の外方にそって遠位逆転
	鎖骨右 (No.12)	" の下に

また、1号人頸骨においては、通常は腐朽に伴って脱落する下顎が正しく咬合していることも併せて指摘された。

このように位置の移動や長管骨の遠位と近位の逆転は何によるのか、一般的に考えられる原因を例挙してみる。

1 人為による	埋葬時	例	・屈曲位埋葬
	白骨化後	例	・後口入室しての祭祀に伴う ・追葬時に先葬骨を片寄せる ・白骨化による軋がり

- | | | |
|---|---------------|---|
| 2 | 自然現象による | 玄室内壁へ天井部の剥落・落盤等の衝撃と跳ね
入口閉塞が破損し、獣類の侵入擾乱 |
| 3 | 浸入水による | 浸透水又は流入水による浮遊移動
一時的流入土砂により押し移動 |
| 4 | 重機を用いた開発工事による | 土砂崩壊や滅失を伴って |

このうち2号人骨の場合には大きく2種類の状況であり、そのひとつは四肢の長管骨でほとんどが遠近位が逆転しており、位置も大きく動いている。また肋骨片が下敷になっているなど部位不明の細片化した骨片が土砂混じりで集積したところがあり、さらにこの上に上腕骨があるなどは、床土を含んで搖き渡しながら集積した結果としか思われない箇所がある。そして頭骨の後軸もそれに伴った移動ではなかろうか。

これは自然的な原因による移動ではなく、人為的に動かした可能性が大きいといえよう。

類似的な事例としては、足子谷横穴墓の4号人・5号人・6号人の場合が挙げられよう。そしてこれは追葬時に先葬骨を移動集骨したものとされている。

1号人骨では消失が著しいが大部分原位置に残存骨がある。しかし右胸～右腰部付近が全くなく、床面まで擾乱土である。そして右上腕骨（遠近位逆転）と右鎖骨は股部あたりの玄室左側壁近くまで大きく移動している。これは白骨化後再度入室して動かしたとは考え難く、仮に3号人（玄室右側に単葬）との間隙は広いがその搬入時に通路確保のため片寄せたのであろうか。

このほか玄室内の経時の剥落や流入土による押しなどは考え難く、獣類による擾乱にしては作為的であるなどで可能性は低い。

以上のほか玄門部や前庭等の堆積土が失われている現況では、さらなる探求は難しかった。

5 埋葬順序

左側の1号・2号人については2号人が先葬とみられ、その大部分の骨体を奥壁寄りに集骨して追葬の1号人を安置するスペースを作ったと見られることから、2号人→1号人の順が想定される。しかし、右側の3号人については初葬であるのか、最終葬であるのかは現状では確定できない。

当地方における初葬又は主葬は概ね玄室右側とする場合が多く、又本事例では唯一土器（転用枕）を伴っている。

6 遺物

残存した床面等において採取した遺物は、3号人の枕に転用されていた須恵蓋壺1組のみであった。

壺蓋（No.2）：口径12.2cm器高4.2cm、天井部は削り放し、体部との界線は鈍い後縫であり、口縁端は内湾し、口唇部は薄く丸味であり、口縁内側には条縫等はない。器壁は天井部で厚く、体部は薄手である。体外面には灰被りで、焼成良好である。

壺身（No.1）：若干焼成の歪みがある。器径13.1cm、口径10.3cm、器高4.2cm、底部から体部へ、そして受部端へとなだらかに移り、その界は不明瞭で椭形に近い。立ち上がりは大きく内傾し、受け部端からの高さは7mmを測る。立

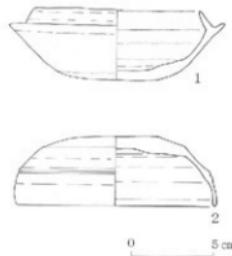


図11 遺物図

ち上がり端は尖りながらわずかに外反気味、受部底はわずかにU字構状をなす。焼成良く、外～底面灰被り釉状である。

以上の所見から大まかに陶邑編年のTK43のうちであり、出雲編年の4期に入るころといえよう。

IV 総括

調査検討のうちから若干の事項を挙げて結びとする。

1) 工事中半壊状態で発見されたマタイ廻横穴墓は、3名の被葬者を認めたが遺存状態は不良であった。そのうち男女各1名は頭位を逆位に一部重複する位置にあり、先・後葬を示すと見られた。

2) 当該墓被葬者は男2・女1名であるが、その頭位を入口側にする男性に対し、女性は奥側としていて、当地方に事例の多い葬法^{註19}であった。

3) 横穴墓の築造に関しては天井部等破損のため不明点が多いが、床面プランについてのみみると、左壁部が大きく拡張するやや長方形妻入りタイプで、床面は正方形をなし、床面には排水溝や造り出しの屍床はなかった。近隣地区内での事例も数ヶ所で点在するが、最も近い同一尾根上に約130m離れて存在した大トシ谷横穴墓とは、床面プランで数cmほど差はあるものの完全に一致し、同一工人によるものと見てよかろう。またその土器の年代観もほぼ同じである。

4) 当該墓は高い尾根上に位置し、旧地形では尾根上に高まりが推定されることから、これを後背墳丘に見立てたものと思われる。またこれに類似する立地・床面プランは近隣地域内にしばしばみられるところで、土器年代TK43期に始まるものかと思われる。

註1 5頁の遺跡一覧表中の文献等

2 杉原・井上『角・宮ノ峰横穴墓・柏原遺跡』1994 横田町教育委員会

3 註1-⑦

4 杉原・井上貴久『足子谷横穴墓』 広瀬町教育委員会

5 註1-⑦

6 井上貴央・他「広瀬町西比田・足子谷横穴墓から検出された人骨について」1997、註4の付録として収録

7 仁多郡内における事例 向かって右側に男性の場合を挙げると次のようである。

横穴墓遺跡名	所在地 (風土記の郷名)	被葬者数			内玄室中央又は右側に男性		山典等
		♂	♀	子	中火	右	
1 上分中山1号	三歳	3				1	註1-⑥
2 コフケ	#	1	1		1		註1-②
3 足子谷	#	3	1	4		1	註4
4 殿ヶ迫1-2号	布施	1			1		註8
5 # 4号	#	1			1		#
6 川子原	三澤	1	1		1		註1-⑥
7 平ヶ谷	#	1				1 (木棺内)	註1-⑦
8 鴨ノ谷尻	横田	3~				1 (石棺内)	#
9 小池奥7号	#	1				1 (石棺内)	#
10 # 9号	#	1?				1	#
11 天狗松4号	#	1				1	#

8 杉原・井上『殿ヶ迫横穴墓群・他』仁多町教育委員会 2001による

9 註7の他にも事例が多い

付編

マタイ廻横穴墓出土人骨

井上晃孝

I. はじめに

マタイ廻横穴墓は、島根県奥出雲町亀嵩地内に位置する。

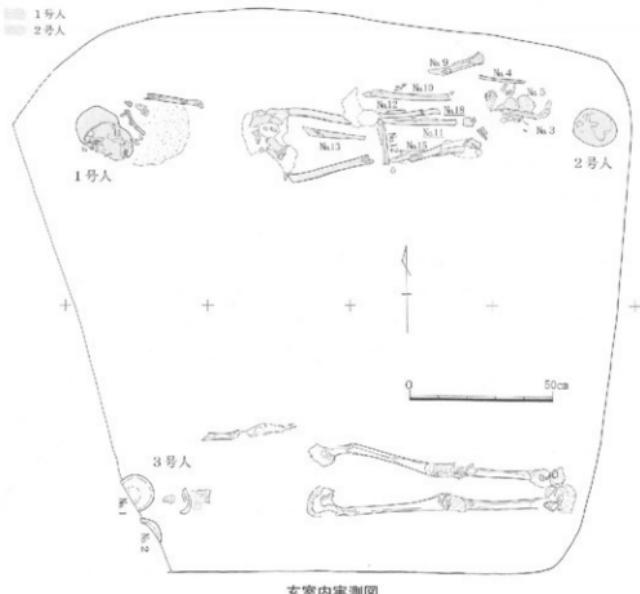
本横穴墓は、たまたま土砂採取作業中に発見され、前庭、狭道、玄門部らは完全に破壊されており、その全容は不詳である。

本横穴墓には、被葬者3体が仰臥伸展位で埋葬されていた。

玄室左側の2体の内、1体は玄室入口側に頭位を置き、奥の方に下肢骨が位置する（1号人骨、♂）。もう1体は集骨状となっているが玄室左側奥側に頭位を置き、入口側に向けて下肢骨が位置している（2号人骨、♀）。

また一部の2号人骨（♀）の下肢骨上に、1号人骨（♂）の下肢骨が交差（重複）する形状で埋葬されていた。

玄室右側の1体は、玄室入口側に頭位を置き（須恵器2ヶを枕にして）奥の方へ足位を配する（3号人骨、♂）。



玄室内実測図

これらの3体の被葬者の骨の遺残性は、当地方の横穴墓からの出土人骨と比較すると、かなり不良であった。

3体とも、骨の遺残骨数が少なく、大半が破損骨で、脆弱化しており、その上、四肢骨の骨内に木の根が侵入しており、骨採取時崩壊した。

以下、1、2、3号人骨について、その概要を報告する。

II. 1号人骨

1. 骨の遺残性

骨格順に遺残するが、脊椎骨はほとんど消失、四肢骨もほとんど完形の骨ではなく、骨の遺残性は不良である。

2. 遺残骨

頭蓋骨

頭 骨：左右の頭頂部、左右の側頭部、後頭部の一部（きわめて脆弱化）、顔面骨消失、左右の上顎骨はほぼ完形、歯牙釘植

下顎骨：比較的良好、歯牙釘植

歯 牙：	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	△	●	×
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8				
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8				
	●	○	○	○	○	△	○	△	△	○	○	○	○	○	○	●				

脊椎骨

頸椎骨：骨片4ヶ（第2頸椎骨の歯突起を含む）

胸椎骨：骨片若干

上肢骨

鎖 骨：左；両端欠、遺残長12.5cm 右；外側端部、遺残長7.3cm

上腕骨：左；骨片状、遺残長24.0cm 右；骨体中央部、遺残長21.0cm

手 骨：左；骨片4ヶ

下肢骨

寛 骨：左；腸骨（骨片化） 右；腸骨（骨片化）

大腿骨：左；骨頭～骨体下部、遺残長32.5cm、推定大腿骨長41.0cm 右；骨体中火部のみ、遺残長35.0cm

脛 骨：左；骨体中央部のみ、遺残長32.0cm 右；骨体中央部のみ、遺残長24.5cm

足 骨：左；足根骨（踵骨、距骨、立方骨、楔状骨、舟状骨）骨片 基節骨、末節骨骨片 右；足根骨（踵骨、距骨、立方骨、舟状骨）骨片

3. 推定性別

頭骨と下肢骨（大腿骨、脛骨）の骨体部の粗面の発達良好らの形態学的特徴から、本屍骨は男性と推定される。

4. 推定年令

頭骨は大きく破損、四肢骨は大きく頑健で成人域である。歯牙の咬耗度から、年齢推定すると、壮年後期位である。

5. 推定身長

大腿骨は一部欠損していたが、現場での推定大腿骨長は41.0cmと推定された。それにより推定身長は藤井法¹⁾156.1cm、ピアソン法²⁾で158.3cmである。

6. その他

遺残骨に疾患、創傷痕を認めない。

III. 2号人骨

1. 骨の遺残性

骨は骨格頸に一応遺残するが、脊椎骨はほとんど消失。かろうじて、四肢骨が遺残するが、破損骨のみで、骨の遺残性は不良である。

2. 遺残骨

頭蓋骨

頭 骨：大きく破損化。左右の頭頂部、左右の側頭部、前頭部

歯 牙：遊離歯牙 1ヶ 右下顎犬歯（ $\overline{3}$ ）

歯冠部崩壊、歯根部遺残 歯頸部う歯（左右貫通）

胸部骨

胸 骨：胸骨柄 約 2cm 遺残

胸骨体 約 6cm 遺残

肋 骨：左右不明の肋骨片 8ヶ

上肢骨

上腕骨：左；骨体中央部のみ、遺残長 20.0cm 右；骨体上部～下端骨、遺残長 24.0cm

尺 骨：右；骨体中央部のみ、遺残長 20.0cm

下肢骨

寛 骨：左；大坐骨切痕部（鈍角） 右；腸骨の一部

大腿骨：左；骨体中央部のみ、遺残長 32.0cm 右；骨体中央部のみ、遺残長 23.0cm

脛 骨：左；骨体中央部のみ、遺残長 27.0cm 右；骨体中央部のみ、遺残長 21.0cm

3. 推定性別

遺残骨は破損骨のみであるが、全般的に細く、きやしやであることと寛骨の大坐骨切痕の形状が鈍角であることから、本尾骨は女性と推定する。

4. 推定年令

頭骨は大きく破損、歯牙は遊離歯牙 1ヶ 遺残するが、歯冠部が崩壊している。

四肢骨も破損骨のみであるが、明らかに成人域の骨であり、年令は壯年期位と推定される。

5. 推定身長

遺残する四肢骨は、上下欠損の破損骨であり、特に大腿骨は上下の位置が逆転しており、遺残長から大腿骨長を推定是不可能であるので、本尾の生前の身長は不詳とする。

6. その他

遺残骨に特異的疾患、損傷痕を認めない。遺残歯牙にう歯（虫歯）がみられた。

IV. 3号人骨

1. 骨の遺残性

仰臥伸展位で、骨は一応骨格頸に遺残するが、消失骨が多く、骨の遺残性は不良である。

2. 遺残骨

頭蓋骨

頭 骨：骨片化

下顎骨：破損した歯槽部、歯牙の釘植なし

上肢骨

上腕骨：左；骨体中央部～下端部、脆弱化、ニカワ状、遺残長16.5cm

前腕骨：左；橈骨か尺骨か不明、脆弱化、ニカワ状、遺残長17.0cm

下肢骨

寛 骨：左；大腿骨頭部に一部遺残、ニカワ状 右；大腿骨頭部に一部遺残、ニカワ状

大転骨：左；骨頭部～骨体下端部、遺残長41.5cm 右；骨頭部～骨体下端部、遺残長41.5cm

脛 骨：左；骨体中央部、遺残長31.5cm 右；骨体中央部、遺残長31.5cm

足 骨：左；足根骨（踵骨、距骨、舟状骨、楔状骨） 骨片 右；足根骨（踵骨、距骨、舟状骨、楔状骨）

骨片

3. 推定性別

遺残四肢骨の大きさ、筋付着部の粗面の発達程度から、本屍骨は男性と推定する。

4. 推定年令

遺残骨から推察するに、本屍骨は成人域であるが、それ以上の年令区分は不詳である。

5. 推定身長

遺残する大脛骨長から、推定身長は藤井法で157.4cm、ピアソン法で159.3cmである。

6. その他

本屍の遺残骨が少なく、破損骨が多いので、特記事項はない。

V. 考 察

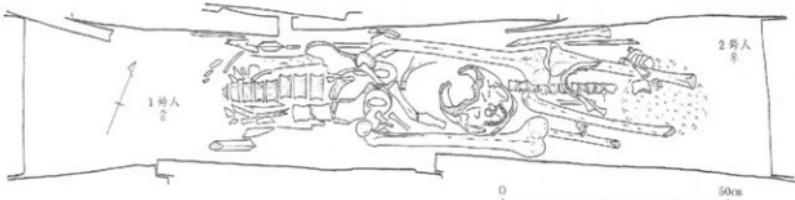
1. 特殊な埋葬形式

男女が頭位を反対にして、下肢骨を交差する埋葬形式は、山陰地方でもきわめてまれな事例である。

このような事例を列記すると、次の通りである。

1) 箱式石棺例

島根県雲南市加茂町川子谷B 1号古墳³⁾の箱式石棺 男女1対

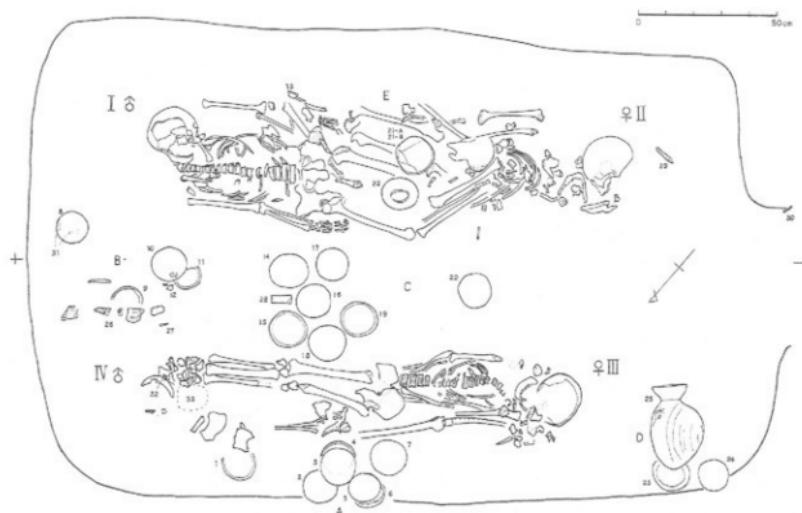


人骨	骨の保存状態	性別	年齢推定	身長推定	血液型	続柄
1号人骨	やや良好	男 性	壮年 (30代前半位)	165cm	A型	夫?
2号人骨	やや悪い	女 性	壮年 (20代)	145cm	A型	妻?

2) 横穴例

①島根県雲南市三刀屋町東下谷6号穴⁴⁾

男女2対



人骨	骨の保存状態	性別	年齢推定	身長推定	血液型	続柄
1号人骨	良好	男性	壮年(30代)	150cm	B型	夫?
2号人骨	やや悪い	女性	壮年(20才前後)	147cm	A型	妻?
3号人骨	やや良好	女性	壮年(20代)	143cm	B型	妻?
4号人骨	悪い	男性	壮年(30才前後)	154cm	B型	夫?
5号人骨	不良	不明	幼児(2~5才)	不明	B型	兒?

②松江市菅沢谷横穴群C-1号穴⁵⁾

男女1対

玄室左側に成人男女2体が頭位を反対にして下肢骨を交差する形状で埋葬されていた。

玄室入口から、左手前方向に頭位をおき、奥の方に足位を配する人骨（1号人骨、♀）、左側奥の方に頭位をおき、玄室入口側に向って足位をおく人骨（2号人骨、♂）である。

玄室右側には、歯牙のみ遺残。3号人骨（小兒、10才位）が埋葬されていた。

③奥出雲町佐白・伊賀武社境内横穴墓⁶⁾

男女1対

横穴墓内には骨完全消失。副葬品の位置から男女2体が、頭位を反対にして下肢骨を交差する形状が推察された。

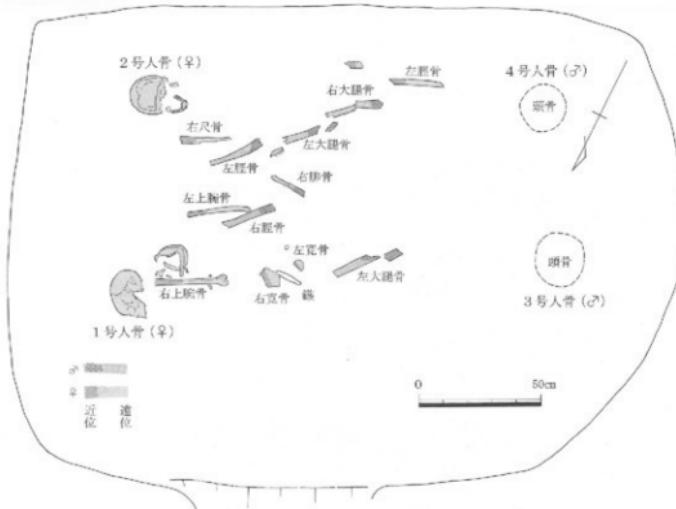
すなわち、玄室右寄り奥に供獻された大刀、鉄器、土器から頭位を奥にした♂、入口側に耳環、玉類、土器を配し、頭位をおいた♀が埋葬されたと推察された。

④雲南市加茂町沢平横穴群N-1号穴⁷⁾

男女2対

玄室内には、発掘当初、頭骨2ヶが遺残、2体が横列に埋葬されたと思料されていた。

遺体振り上げ時、別の遺体骨が反対方向から交差状に遺残していることが確認された。



玄室内の左壁際に1号人骨(♀)が頭位をおき、下肢骨を横に、右壁際に向って埋葬、反対方向から、3号人骨(♂)の頭骨は完全消失していたが、かろうじて下肢骨(大腿骨、脛骨)が交差した形状で認められた。

さらに奥の方、左壁際に2号人骨(♀)が頭位をおき、下肢骨を右壁際に向って横列に埋葬されていた。反対方向から、4号人骨(♂)の頭骨は完全消失していたが、左方向に下肢骨が交差する形状で遺残していた。

2. 本横穴墓出土被葬者3体の関係

横穴墓^⑧は家族墓または血族墓的性格が強いので、本横穴墓も恐らく家族墓的性格を有していると類察している。本横穴墓の玄室左側には、成人男女2体が頭位を反対にして下肢骨を交差する形状で埋葬されていた。両者は生前きわめて親密な関係が推察され、恐らく夫婦であろうと思料している。

そして、玄室右側には、成人男性1体が埋葬されていた。この男性は、恐らくその夫婦の子供（子息）であろうと思料している。

これに似似する事例として、松江市皆沢谷横穴群C-1号穴がある。

玄室左側に成人男女2体が頭位を反対にして下肢骨を交差する形状で埋葬されていた。

玄室右側には、小児（10才位）1体が埋葬されていた。

がしかし、男女が頭位を反対にして下肢骨を交差する埋葬方式にも相異点がみられる。

本横穴墓の玄室左側では、男性が入口側に頭位をおき、女性は奥側に頭位をおき、お互い下肢骨を交差する形状であるのに、松江市皆沢谷横穴群C-1号穴の玄室左側では、女性が入口側に頭位をおき、男性が奥側に頭位をおき、お互い下肢骨を交差する形状である。

このように、男女が頭位を反対にして、下肢骨を交差する埋葬形式においても、横穴墓によって、男女の頭位の位置が異なる点を重視してゆきたい。

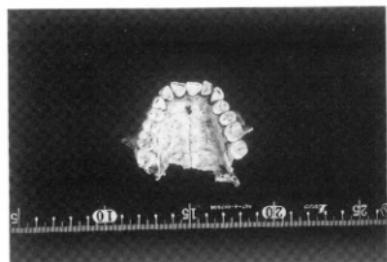
今後、事例数をふやし、地域性、民俗的見地からも検討を加えてゆきたい。

VI. ま と め

島根県奥山雲町亀嵩地内のマクイ廻横穴墓には、被葬者3体が仰臥仰展位で埋葬されていた。玄室左側には、男性（1号人骨）、女性（2号人骨）2体が頭位を反対にして、下肢骨を交差（重ね合わせ）する形状で埋葬されており、山陰地方においても、特殊な埋葬形式である。玄室右側には、男性（3号人骨）1体が埋葬されていた。1号人骨は男性、年令は壮年後期位、身長は藤井法で156.1cm、ピアソン法で158.3cmである。2号人骨は女性、年令は壮年期位、身長は不詳である。3号人骨は男性、年令は成人域、身長は藤井法で157.4cm、ピアソン法で159.3cmである。横穴墓は家族墓ないし血族墓的性格が強いので、本横穴墓の被葬者3体の関係は、恐らく、夫婦とその子供（子息）であろうと思料している。

文 献

1. 藤井 明（1960）：四肢長骨の長さと身長との関係について、順天堂大学体育紀要 3, 49-61
2. Pearson, K. (1899) : Mathematical contributions to the theory of evolution. V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc. London. Ser. A. 192, 169-244
3. 井上晃孝（1988）：川子谷B 1号墳出土人骨について、神原地区遺跡分布調査・川子谷B 1号墳発掘26-32, 島根県加茂町教育委員会
4. 井上晃孝（1984）：東下谷横穴群出土人骨について、東下谷横穴群発掘調査報告書 30-48, 島根県三刀屋町教育委員会
5. 井上晃孝（1994）：皆沢谷横穴群山上人骨について、文化財調査報告書 第3集 65-74, 皆沢谷横穴群、松江市教育文化振興事業団
6. 杉原清一 他（2001）：伊賀武社境内横穴墓, 8-16, 島根県仁多町教育委員会
7. 加茂町教育委員会（1990）：詳細分布調査報告書、加茂町の遺跡－赤川以南－, 27-33, 島根県加茂町教育委員会
8. 池上 悟（1980）：横穴墓、東京、ニューサイエンス社



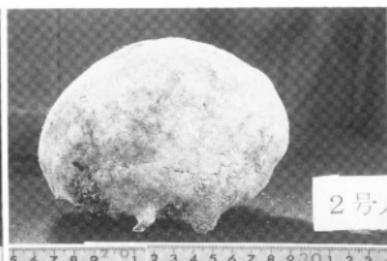
1



2



3



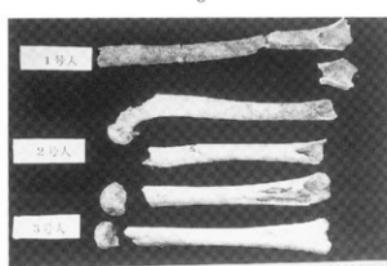
4



5



6



7

1. 1号人骨 (♂): 上顎骨 薦牙
2. 脊骨 (左右)

3. 2号人骨 (♀): 頭骨 頭頂面

4. 頭骨 側頸面

5. 寬骨 (左右)

6. 上脣骨 (左右)

7. 1、2、3号人骨: 大腿骨 (左右)



西麓からの遠望



丘頂からの眺望
(西へ流れる亀嵩川沿い)



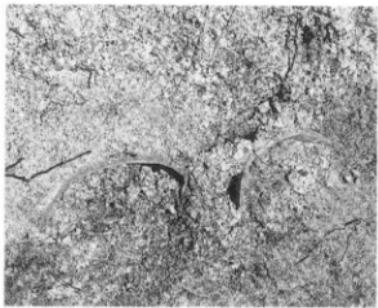
中腹から見上げて



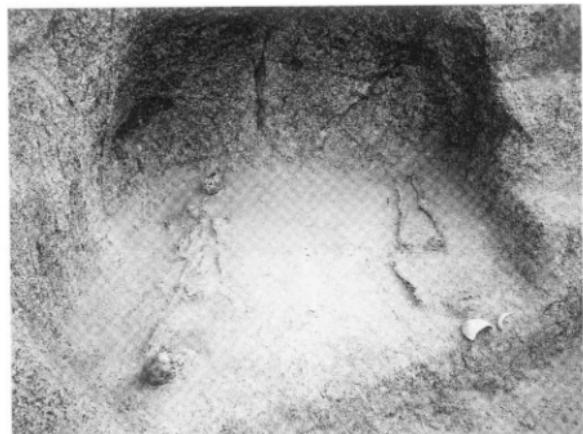
工事中に開口



崩土排除



破断面に土器



玄室内 完掘状况



発掘作業（玄室内）

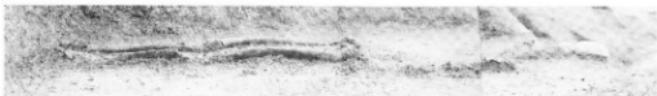


人骨取上げ作業



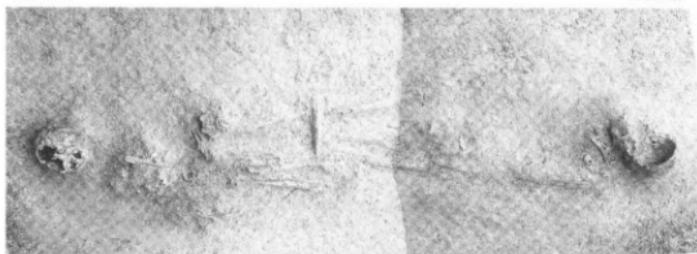
出土土器（3号人枕転用）

3号人骨



2号人骨

1号人骨



小池横穴群

(旧横田町大字中村 錦日地区) 平成2年調査 -農地開発-

小池奥横穴群

(同 上) 平成元年調査 -農地開発-

天狗松横穴群

(旧横田町大字下横田 川西地区) 昭和62年・平成元年調査 -農地開発-

滝ノ谷尻横穴

(旧横田町大字稻原 原口地区) 平成元年調査 -大規模林道-

収録にあたって

標記の遺跡は、旧横田町が行った国営農地開発事業及び国営大規模林道日野・金城線敷設の工事に関わるもので、計画地内又は工事中発見により、横田町教育委員会が発掘調査を行ったものである。

当時は開発工事の進行に即応すべく発掘に次ぐ発掘であり、内業調査作業は後送りの状態であった。またその後の町村合併などで、結果としてこれらの出土遺物・データ整理や検討は中途のまま放置となり、今日に至っていた。

しかしこれらの成果は公刊の要ありとし、諸データ等不備ながらここに収録して向後の活用に対応しようとするものである。

摘要

・当時の原図・トレース図はそのまま用い、補充的記入及び一部の土器や鉄器は今回杉原・藤原が実測したものもある。

・挿図の版下トレースは藤原が補充して行った。

・各遺構等の記事は調査担当であった（故）吾郷和宏の概報記述により、一部に杉原が補訂を加えた。

・出土人骨の取り上げ鑑定は井上晃孝先生（鳥取大学医学部助教授一当時一）に依頼して行われており、その鑑定書はそのまま収録した。

・遺構写真は当時のもの、出土遺物はすべて今回撮影して各々に調査時の取り上げ番号を付した。

・編集は杉原清一・藤原友子が担当し、栗原久美子が補佐した。



図1 位置図

- M13 天狗松横穴群
(昭和63年～平成元年)
- M57 小池横穴群
(平成2年)
- M142 小泡奥横穴群
(平成元年)
- M146 遺ノ谷尻横穴
(平成元年)

番号は遺跡台帳に同じ () は調査年

小池横穴群

I 遺跡の環境と調査に至る経緯

小池横穴群は、島根県仁多郡横田町大字中村字岩屋寺406に所在する。市街地から北東に約2kmの横田盆地縁辺の北側丘陵に位置する。南に延びる丘陵稜線上の標高約380mに2基の墳丘が並び、その下約6~7mに横穴が穿たれている。付近の水田面から丘陵頂部までの比高は約20mである。丘陵の西側下方には“小池”と呼ばれる灌漑用の堤があり、その名をとてこの墳丘により小池古墳群と呼称されていた。

本横穴群は、昭和50年に国営農地開発事業に伴う事前の分布調査によって発見された。横田4団地の造成工事にあたっては、当初は現地保存の方向で検討したが、土地所有者の農地への強い要望があり、また墳丘の測量と試掘調査では、墳丘の規模は町内では大きいものであるが、埋葬施設の確認もできず遺物も少量であったことなどから、事業者、土地所有者、教育委員会の三者により協議を重ねた末、記録保存の方向での本調査を実施することにした。調査は、事業者である中国四国農政局横田開拓建設事業所の委託を受け、町教育委員会が行った。人骨の鑑定は井上亮孝助教授にお願いした。

II 遺構の概要

本横穴群は円墳状墳丘2基から構成され、北側を1号墳丘、南側を2号墳丘とした。また、それぞれの墳丘に対応する横穴を1穴と3穴検出した。

1. 1号墳丘

1号墳丘は、径15m、高さ約2mの円墳で、墳頂部での標高は381.25mある。東側を除く墳丘裾部には幅4m、深さ0.6mの溝がめぐる。墳丘はほとんどが盛土により築造され、墳丘の斜面下方部分は地山を削り出して造られている。盛土は、旧地表をそのまま残し、20~50cmの厚さで互層状に積み上げて形成されている。墳頂部での盛土の厚さは1.1~1.2mになる。埋葬主体は確認できなかった。西側と南側の墳丘裾部には径0.8m、深さ0.3mの皿状の土坑が掘られ灰が充填されていた。遺物は、墳頂部から須恵器の甕片がまとめて出土した。また、盛土内からは古式土師器片が少量出土した。

1) 1-1号横穴

遺構の概要

1号墳丘東側斜面の下方、周溝の反対側斜面の標高374.80m、墳頂からの比高6.5mに掘られた横穴である。玄室の天井部は頂上からすべて落盤し失われていた。墓道は長さ7.1m、幅1.2m~0.4mの狭長なもので、前側に向かって下がる。奥道は長さ1.35m、幅0.5mを測る。奥門前側には溝を掘り、また両側にはそれぞれ1個の川原石を据



図2 小池横穴群地形図

えていた。閉塞用の蓋は残っていなかったが、石と墓門の地山との間には約5cmの隙間があり、そこに木板等が置かれ閉塞がされていたものと考えられる。玄室は、長さ2.3m、幅1.9m～2.1mを測り、高さは破壊しているためよくわからないが約1.7mが推定される。天井形態もはっきりしないが妻入りの三角断面形を呈するものと思われる。玄室内は、奥に向かって左側はベッド状に地山を削り出して屍床がつくられ、人頭大の石が上面のレベルをほぼ同じにして5ヵ所に置かれていた。

遺物の出土状態

屍床上からは1体の人骨（青年期男性）が検出された。人骨は玄室奥側を頭にして安置され、脆弱した頭骨以外はほとんどが失われていた。副葬品としては、人骨の首のあたりから玉類が出土した。種類は、勾玉5（碧玉製、赤瑪瑙製）、算盤玉2（赤瑪瑙製）、平玉1（水晶製）、丸玉48（ガラス製、碧玉製）、小玉178以上（ガラス製）、管玉1（碧玉製）があった。検出状況から小玉を除く玉は首飾りとして束状に首のあたりに置いたと思われ、小玉は左右の耳のあたりの下からまとめて検出されており、古墳時代の男子が行っていた“みずら”と呼ばれる結髪の装身具として使われていたものかもしれない。その他人骨左腕の横には木部が残存した鉄斧が添えられていた。須恵器類は頭部側に蓋坏4組（№1～4）、足下に蓋坏2組（№8～9）、提瓶1（№10）が置かれていた。また、墓道前端の埋土上面からは須恵器の甕片1個体分が破碎した状態で出土した。

2. 2号墳丘

2号墳丘は1号墳の南側に溝を挟んで造られた径9m、高さ0.8mの円墳で、墳頂部での標高は378.75mである。北及び西側の墳丘裾には幅1.5m、深さ0.4mの溝がめぐる。1号墳丘と同じく墳丘は盛土で造られている。旧地表はそのまま残し、盛土が行われている。墳頂部での盛土の厚さは0.4mになる。埋葬主体は確認できなかった。遺物は、西側周溝内から須恵器の甕片が2片、南側斜面から9片が出土した。

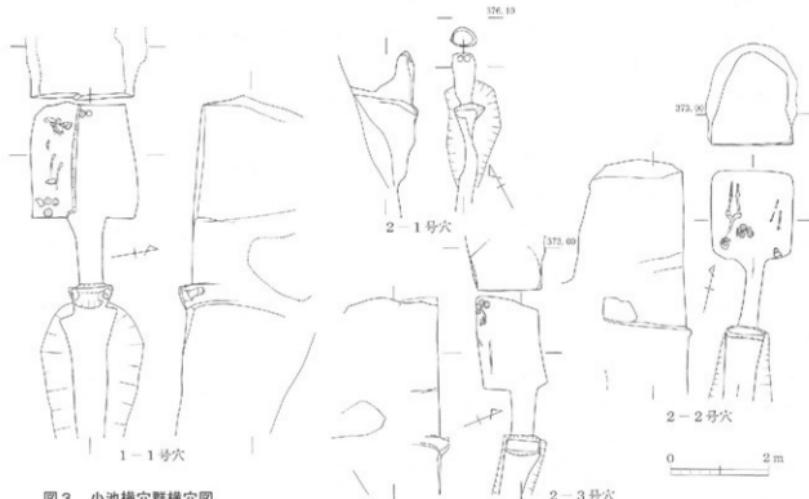


図3 小池横穴群横穴図

1) 2-1号穴

遺構の概要

2号墳丘の南西斜面に掘られた小横穴で、床面の標高は375.55mである。横穴は、墳丘上面から堅に2.0×1.0～0.5mの坑を掘り、そこから横に掘られている。墓道は1.0mと短く、閉塞部に向かって墓道のレベルは下がっている。閉塞は90×75cm、厚さ10cmの板状カンラン石玄武岩の一枚石で閉塞されていた。横穴は長さ1.1m、幅0.5m、高さ0.35mを測り、ドーム形の天井を呈する小横穴で、墓道部は造られていない。

遺物の出土状態

玄室奥部には須恵器の蓋（№1）と壺（№2）を伏せた状態で枕にして人骨（性別不明小兒）の頭部が検出されたが、保存状態は悪く頭骨片と齒が残存していただけだった。横穴の規模からも小兒の埋葬を思わせる。中への副葬品は枕にされていた蓋壺1組のみであるが、墓道の埋土上面には須恵器の壺片がまとめて検出された。

2) 2-2号穴

遺構の概要

2号墳丘南麓の斜面に掘られた横穴で、床面の標高372.4m、墳頂からの比高約6.4mある。玄室の天井部は墳頂からすべて落盤し失われていた。墓道は長さ7.0m、幅0.5～0.8mの狭長なものである。墓道前端部より板石が出土したが、これは閉塞用に使われていたものが追葬の際に使用されず放置されたものではないかと考えられる。墓道は長さ1.4m、幅0.35mを測る。羨門前側には溝を掘り、閉塞は羨門部で板状のカンラン石玄武岩を4枚組合せ閉塞していた。玄室は、長さ1.8m、幅1.7mを測り、高さは破壊しているためよくわからないが約1.4mが推定される。天井形態も不明だが妻入りの三角断面形を呈するものと思われる。

遺物の出土状態

玄室内には2体の人骨が頭位を前側にして玄室の両側に安置されていた。人骨の遺存状態は悪く脆弱した頭骨と大腿骨、脛骨が残存していた。副葬品は1号人骨（壮年期男性）の首あたりに土製の小玉が10数個（№13）輪状に検出された。また、須恵器の蓋壺が3組（№1～4）残っていた。一つの壺（4-2）の中からは長さ3cmの鉄針が入っていた。2号人骨（性不明10～12才）に伴うと思われる副葬品は確認できなかった。また、墓道埋土上面には須恵器壺片が出土した。

3) 2-3号穴

遺構の概要

2号墳丘南東側斜面裏の標高372.1m、墳頂からの比高約6.7mに掘られた横穴である。玄室の大井部は頂上からすべて落盤し失われていた。墓道は長さ3.8m、幅0.65～0.4mの狭長なもので、玄室に対し西に13.5°傾っている。羨道は長さ1.0m、幅0.45mを測る。羨門前側には溝を掘り、閉塞は羨門部で木板によって閉塞していたと考えられる。玄室は、長さ1.5～2.0m、幅1.3mを測り、平面プランは長方形で片袖を呈す。高さは破壊しているためよくわからないが約1.4mが推定される。天井形態もはっきりしないが妻入りの三角断面形を呈するものと思われる。

遺物の出土状態

奥壁に向かって左側には1体の人骨（壮年女性）が頭位を奥側に須恵器の蓋壺を枕にして安置されていた。人骨の遺存状態は悪く脆弱しており頭骨と、上腕骨、若干の肋骨が残存していた。副葬品は人骨の左上腕骨上に刀子1（№1）と、枕に転用された須恵器の蓋壺1組（№25～26）であった。また、墓道埋土上面には須恵器壺片が出土した。

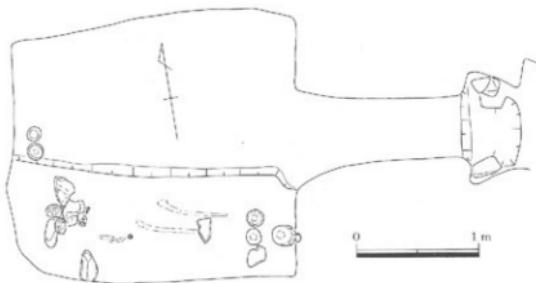


図4 小池横穴1-1号穴

III まとめ

小池古墳群は今回の調査の結果、墳丘上に埋葬主体ではなく、墳丘斜面あるいは墳丘下方斜面に埋められた横穴を埋葬主体とするもので、いわゆる後背墳丘を有する横穴であることがわかった。よって小池古墳群と呼称するより小池横穴群としたほうが適当と考えられる。このような後背墳丘を有する横穴墓は、北九州、周防、山陰で発見されている

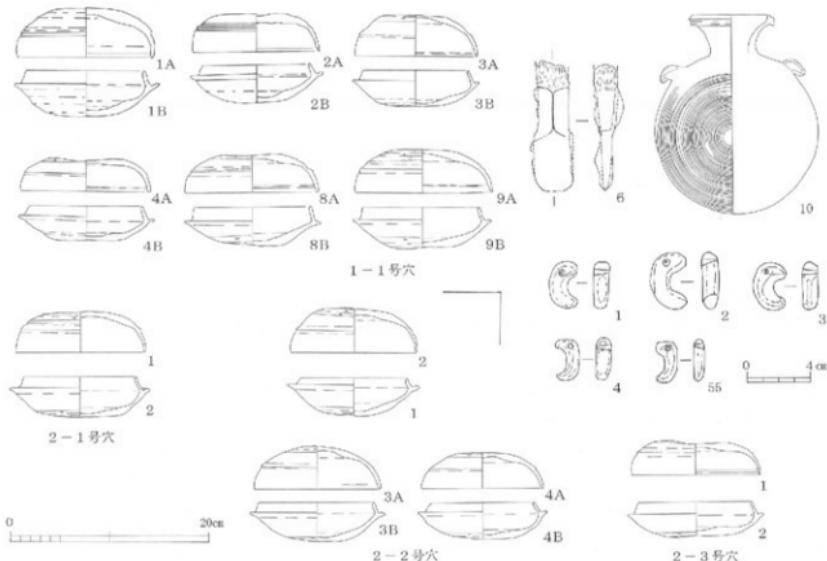


図5 小池横穴群遺物図

形式で、最近になって注目されたものである。県内でも数例の調査例しかない。町内では、小池奥横穴群など地山を削り出して後背墳丘を造ったものは今までにも発見されているが、大規模な盛土によって墳丘を造り出したものはこれが初例である。また横穴が穿たれた方向を除く墳丘裾には周溝が巡っていた。

横穴の構造上の特徴についてみてみると、墓道は狭長で断面形はV字形を呈す。玄室は長方形かほぼ正方形に近い形を呈する。2-3号穴は、墓道部が一方に寄った片袖のプランで、広くなっているところに埋納されていた。天井形態は通例の妻入り三角断面形を呈すると思われる。

閉塞はいずれも羨門部で行っており、羨門前に溝を掘り、2-1号穴、2-2号穴の閉塞は町内の野呂山に産出するカンラン石玄武岩の板石を用いていたことが確認された。1-1号穴、2-3号穴については閉塞用の蓋石が残っておらず不明であるが、1-1号穴の羨門前に蓋等を支える役目を果たすと思われる石が据えられていたことなどから木板によって閉塞が行われていたものと考えられる。

埋葬施設としては、1-1号穴では、特に被葬者に対して丁寧な扱いがなされており、玄室左側に削り出しの屍床が造られた上に川原石が置かれていた。このように川原石を置くのは、棺台に使用したものと推定されている。また、2-1号穴、2-3号穴では、須恵器の蓋坏を利用して枕が使用され、1組のセットになる須恵器蓋坏が蓋と坏を伏せて並べた状態で枕にされていた。

小横穴であった2-1号穴は、2号墳丘の上面から縦坑を掘り、そこから横に掘られた“地下式横穴”と呼ばれるものに近い形式のもので、小横穴の築造方法を知る上で注目される。

被葬者については、いずれの横穴も1~2体の人骨が検出されたが、玄室内は土砂が充満していたため、人骨の遺存状態は悪く脆弱した頭骨が残っていたに過ぎなかった。そのため、身長等については不明である。

副葬品としては、1-1号穴から出土した250個以上の玉類が注目される。玉には、勾玉、算盤玉、平玉、丸玉、小玉、管玉と様々な種類があり、碧玉、赤瑪瑙、水晶、翡翠、ガラス製とその材質にも富んでいる。このように多量の玉類が出土したのは町内では初例である。^{※補注}また、墓道の埋土上面で出土した壺片と背後の墳丘上で出土した壺片や、墳丘裾部で確認された火を焚いた跡などは、横穴への埋葬に際しての埋葬儀礼を考えいく上で貴重な資料になるものと思われる。

※補注（翡翠ではなく綠泥石の可能性が高い）

小池奥横穴群

I 遺跡の環境と調査に至る経緯

小池奥横穴群は島根県仁多郡横田町大字中村字岩屋寺2536-35他の番地に所在する。横田の街から北東に約2km離れた横田盆地縁辺の北側丘陵に位置する。岩屋寺山から南に分岐して延びる2つの丘陵の標高約395~404mの尾根上から約6~8m下りた斜面に穿たれ、ここから横田盆地中央部が一望できる。

本横穴群は、国営農地開発事業横田4団地農地造成工事の工事中に発見された。平成元年6月26日、重機による伐採した立木の片付け作業中に6穴の横穴（A区：1~6号穴）が発見され、直ちに事業主体である中国四国農政局横田開拓建設事業所から横田町教育委員会に協議があった。横穴が発見された丘陵は農地造成の計画の中心部にあたり、工事上主要部分にあたるため現状保存は極めて難しいことから記録保存のための事前調査を実施することとなった。調査は横田開拓建設事業所より委託を受け、7月14日から発見された6穴の横穴の概要調査と横穴の存在が推定される丘陵裏側斜面（B区）及び丘陵尾根上にトレンチを設定し試掘調査を行った。試掘調査の結果、B区から新たに2穴の横穴とA区尾根上に2基のマウンドの存在を確認し、また、A区と谷を挟んだ向かいの丘陵斜面からも2穴の横穴を発見し、引き続き現場調査を8月18日から9月16日まで実施した。

II 遺構の概要

調査の対象となった一帯の地形は北側の丘陵基部から南西及び南に分岐する2つの尾根上及び斜面である。2つの丘陵の間にあたる谷の南端には“小池”と呼ばれる灌漑用の堤がある。横穴群はその奥に位置することから小池奥横

図6 小池奥横穴群地形図



穴群と呼ぶことにした。調査地は地形上また調査の進行上から南西に延びる西側丘陵の東斜面をA区、その西斜面をB区、南に延びる東側丘陵の西斜面をC区とした。横穴はA区に7穴（1～6号・11号横穴）、B区に2穴（7・8号横穴）、C区に2穴（9・10号横穴）の計11穴の横穴を検出した。A・B区の丘陵上には地山を削り出して造られた2つの墳丘状の高まりが認められた。またA区11号横穴（小横穴）の周りには、閉塞石や石棺の石材を細工したと思われる場所と2ヶ所の焚き火跡を検出した。

1. A区

小池奥A区では、横穴6穴と小横穴1穴、小横穴の周りに閉塞石や石棺の石材を細工したと思われる場所と2ヶ所の焚き火跡を検出した。横穴は、丘陵基部側から順に1～6号横穴、小横穴を11号横穴と呼称した。また、6穴の横穴群は丘陵基部側の標高402.2～399.9mの上段に位置する1～3号横穴と、前側の標高398.0～396.5mの下段に位置する4～6号横穴の2群に分けられる。

1号横穴

- 立地 A区横穴群中もっとも丘陵基部に位置する。墓道前端部での標高は400.2mで、丘陵頂部より約7.5m下に穿たれ、開口方向は東（S83° E）に向き、区内の他の横穴とは主軸方向を異にする。
- 墓道・前庭 墓道は現状で長さ3.6m、床面幅0.6～0.9m、上端幅1.5mで、澳門部方向に緩やかに上がる狭長なもので、澳門前の基礎層の掘り込みの深さは3.0mあり、墓道の断面はV字形を呈す。墓道前端部辺りの地表面下には大型甕の破片が多数出土した。
- 澳門・閉塞 閉塞は墓道前の澳門部で行われており、幅0.5m、高さ0.9mの澳門には幅18cm、深さ11cmの蓋受けの割り込みが掘られ、床面には主軸方向に向交した長さ52cm、幅6cm、深さ8cmの溝が掘られている。蓋受けの割り込みを有することから閉塞は木蓋の類を構に据え、割り込みにはめ込んだものと考えられる。
- 墓道・玄室 墓道は長さ1.0m、澳門部で幅0.4m、高さ1.1m、玄門部で幅0.5m、高さ0.7mを測り、長方形状の床面で、大井がドーム形をした墓道が玄室に付設する。玄室は長さ1.6m、幅は奥壁側1.0m、玄門側1.0m、高さ0.9mを測り、奥壁を短邊とする長方形状の平面形をなす。天井の横断面形はドーム形を呈する。
- 遺物出土状態 玄室内には、人骨が3体あり、奥壁に向かって左側から1～3号人とした。人骨の保存状態は比較的よく、いずれも仰臥伸展位で1号人、2号人は前側を、3号人は奥側を頭にして安置されていた。1号人の胸のあたりの床面には赤色顔料がみられた。人骨の鑑定結果は、1号人は壮年の女性、2号人骨は壮年の男性、3号人骨は青年期の女性であった。副葬品は、左側奥隅に蓋壺3個（No.1～3）、1号人骨左腰あたりに蓋壺1組（No.4 A・B）とハソウ（No.5）、頭部に枕に転用された壺身2個（No.6～7）が置かれ、2号人骨の頭部に枕に転用された蓋壺2個（No.8～9）、3号人骨の足下に壺身2個（No.10～11）と小型壺（No.12）があった。また左玄門部に鉄鏃6本（No.14）、墓道に小型壺1個（No.13）が置かれていた。

2号横穴

- 立地 1号横穴の南隣に位置する。墓道前端部での標高は402.2mで、丘陵頂部より約5.6m下に穿たれ、南東（S44° E）に開口する。
- 墓道・前庭 墓道は現状で長さ0.8m、床面幅0.5m、上端幅1.3mで、澳門部方向に緩やかに上がる狭長なもので、澳門前の基礎層の掘り込みの深さは約1.4mあり、墓道の断面はV字形を呈す。
- 澳門・閉塞 閉塞は澳門部で行われており、幅0.7m、高さ0.9mの澳門には幅11cm、深さ10cmの蓋受けの割り込みが掘られ、床面には主軸方向に直交して長さ64cm、幅5cm、深さ8cmの溝が掘られている。蓋受けの割り込みを有す

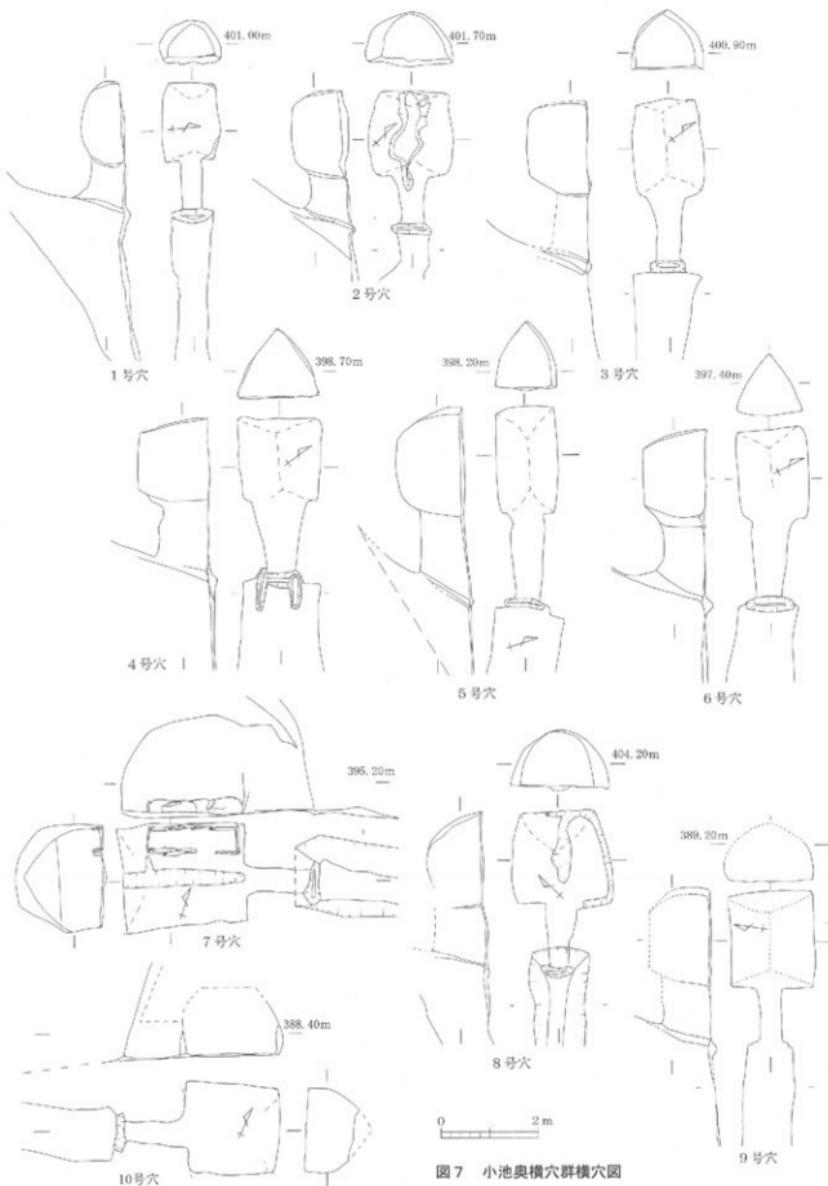


图7 小池奥横穴群横穴圆

ことから閉塞は木蓋の類を構に据え、刺り込みにはめ込んだものと考えられる。

・墓道・玄室 墓道の長さ1.0m、奥門部で幅0.6m、高さ0.9m、玄門部で幅0.8m、高さ0.8mを測り、長方形状の床面で、天井がドーム形をした墓道が玄室に付設する。玄室は長さ1.8m、幅は奥壁側1.4m、玄門側1.4m、高さ1.1mを測り、正方形に近い長方形状の平面形をなす。天井の横断面形は鈍いテント形を呈する。

・遺物出土状況 玄室内には、人骨3体分があり、奥壁に向かって右側から1～3号人とした。人骨の保存状態は悪い。1号人は小児で性別不明。2号人は壮年男性。3号人は壮年の女性で蓋壺を枕にして安置されていた。副葬品は、3号人の枕に転用された蓋壺6個（№2～7）、足下に壺身1個（№20）、ハソウ1個（№19）、短頸壺と小型壺（№18, 21）と左腰横に鉄旗5本（№23）が置かれていた。中央奥には提瓶（№8）、有蓋高壺（№9）、短頸壺（№10）、中央に刀子（№22）、有蓋高壺2個（№14, 16）、壺蓋2個（№13, 15）、短頸壺（№17）、左奥隅（1号人の頭位）に蓋壺3個（№11, 12A・B）があった。他に勾玉（№26）、小玉が出土した。

3号横穴

・立地 2号横穴の南隣に位置する。墓道前端部での標高は399.9mで、丘陵頂部より約6.8m下に穿たれ、南東（S 48° E）に開口する。

・墓道・前庭 墓道は現状で長さ3.4m、床面幅1.0～1.4m、上端幅2.2mで、奥門部方向に緩やかに上がる狭長なもので、奥門前の基礎層の掘り込みの深さは2.2mあり、墓道の断面はV字形を呈す。

・墓門・閉塞 閉塞は奥門部で行われており、幅0.6m、高さ0.9mの奥門には、幅12cm、深さ16cmの蓋受けの刺り込みが掘られ、床面には主軸方向に直交して長さ46cm、幅8cm、深さ7cmの溝が掘られている。蓋受けの刺り込みを有することから閉塞は木蓋の類を構に据え、刺り込みにはめ込んだものと考えられる。

・墓道・玄室 墓道は長さ1.4m、奥門部で幅0.6m、高さ1.1m、玄門部で幅0.8m、高さ0.6mを測り、長方形状の床面で、天井がドーム形をした墓道が玄室に付設する。玄室は長さ2.0m、幅は奥壁側で1.2m、玄門側で1.3m、高さ1.2mを測り、奥壁を短辺とする長方形状の平面形をなす。天井の横断面形は鈍いテント形を呈する。

・遺物出土状況 玄室内には、駆倒化した骨片があり、成人域の男性とされた。奥を頭位にして安置されていたと考えられる。副葬品は人骨の右腕あたりから刀子（№5）、中央奥に蓋壺1組（№3 A・B）、中央に小型壺（№4）、右奥に蓋壺2組（№1 A・B, 2 A・B）が置かれていた。

4号横穴

・立地 3号横穴の南隣、1～3号横穴より一段低い位置に4～6号横穴は穿たれている。墓道前端部での標高は398.0mで、丘陵頂部より約7.3m下に穿たれ、南東（S 53° E）に開口する。

・墓道・前庭 墓道は現状で長さ2.0m、床面幅1.6～1.8mで、奥門部方向に緩やかに上がる狭長なもので、奥門前の基礎層の掘り込みの深さは2.5mある。

・墓門・閉塞 閉塞は奥門部で行われており、幅0.8m、高さ1.1mの奥門には、幅12cm、深さ6cmの蓋受けの刺り込みが掘られている。奥門前は、発見時に破壊されていたが、カンラン石玄武岩の板状剝石の根元が残り、門の造り出し

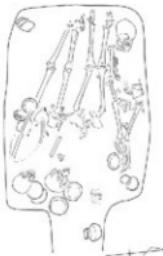


図8 1号穴

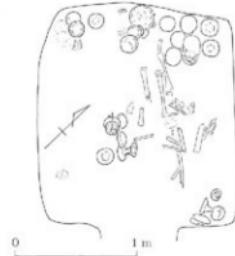


図9 2号穴

が認められた。床面には主軸方向に直交して長さ46cm、幅8cm、深さ8cmの溝が掘られている。

・ 羨道・玄室 羨道は長さ1.7m、羨門部で幅0.6m、高さ1.1m、玄門部で幅1.2m、高さ0.6mを測り、台形状の床面で、天井がドーム形をした羨道が玄室に付設する。玄室は長さ2.0m、幅は、奥壁側1.2m、玄門側1.3m、高さ1.2mで、奥壁側が長い台形状の平面形をなす。天井の横断面形は鈍いテント形を呈する。

・ 遺物出土状態 玄室内には、数体の人骨が集骨状に埋葬されていた。副葬品は、左玄門部にまとまっておかれ、高杯2個（No.4.22）、蓋杯21個（No.5～21.23～26）が出土した。また、羨道に蓋杯2個（No.28～29）、平瓶1個（No.30）があった。他には、耳環（No.1）、勾玉2個（No.2～3）があった。

5号横穴

・ 立地 4号横穴の南隣に位置する。羨道前端部での標高は397.7mで、丘陵頂部より約6.0m下に穿たれ、南東（S 67° E）に開口する。

・ 羨道・前庭 羨道は現状で長さ2.1m、床面幅1.4mで、羨門部方向に緩やかに上がる狭長なもので、羨門前の基盤層の掘り込みの深さは2.3mある。

・ 羨門・閉塞 閉塞は羨道前の前門部で行われており、幅0.6m、高さ1.0mの羨門には、深さ8cmの蓋受けの割り込みが掘られ、床面には主軸方向に直交して長さ68cm、幅2cm、深さ5cmの溝が掘られている。蓋受けの割り込みを有することから閉塞は木蓋の類を溝に据え、割り込みにはめ込んだものと考えられる。

・ 羨道・玄室 羨道は長さ1.8m、羨門部で幅0.5m、高さ1.0m、玄門部で幅0.7m、高さ0.9mを測り、長方形状の床面で、天井がドーム形をした羨道が玄室に付設する。玄室は、長さ2.3m、幅は、奥壁側で1.0m、玄門側で1.0m、高さ1.4mを測り、奥壁を短辺とする長方形状の平面形をなす。天井の横断面形はテント形を呈する。床面には、須恵器横瓶の破片による屍床が検出された。

・ 遺物出土状態 玄室床面上には、須恵器の横瓶1個体分の破片（No.6）が右玄門部、中央部、奥壁部と3ヵ所に散かれていた。人骨片は性別不明、成人域とされた。玄門部の須恵器片横から耳環1対（No.4～5）が検出され、位置から須恵器床の上に前を頭位にした1体の埋葬が想定された。他の副葬品には土師器碗2個（No.1～2）が大きい塊の中に小さい方を入れて伏せた状態であった。また、羨道部に平瓶（No.3）が置かれていた。

6号横穴

・ 立地 5号横穴の南隣に位置する。羨道前端部での標高は396.5mで、丘陵頂部より約7.0m下に穿たれ、南東（S 66° E）に開口する。

・ 羨道・前庭 羨道は現状で長さ4.0m、床面幅1.2～1.9m、羨門部方向に緩やかに上がる狭長なもので、羨門前の基盤層の掘り込みの深さは3.4mある。

・ 羨門・閉塞 閉塞は羨門部で行われており、羨門は幅0.5m、高さ0.8mで蓋受けの割り込みははつきりしないが、床面には主軸方向に直交して長さ66cm、幅5cm、深さ12cmの溝が掘られている。閉塞は木蓋の類を溝に据え、割り込みにはめ込んだものと考えられる。

・ 羨道・玄室 羨道は長さ1.8m、羨門部で幅0.5m、高さ0.8m、玄門部で幅0.9m、高さ1.0mを測り、長方形状の床面で、天井がドーム形をした羨道が玄室に付設する。玄室は、長さ1.8m、幅は、奥壁側で1.3m、玄門側で1.3m、

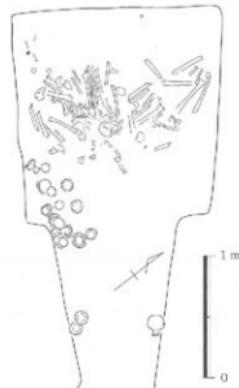


図10 4号穴

高さ1.3mを測り、奥壁を傾斜とする長方形状の平面形をなす。天井の横断面形はテント形を呈する。

・遺物出土状況 極めて脆弱化した人骨片がわずかに認められた。副葬品は玄室の側壁沿いに須恵器蓋壺（No.1～5）、墓道に蓋壺（No.6, 7）、墓門前の墓道に壺蓋（No.8）が置かれていた。

その他の遺構

6号横穴の西約9mの位置の中央部分には小横穴（11号横穴）があり、その前方には6号横穴墓道上に通じる道が検出された。道沿いの横穴に隣接した北側と南側には火を使用した跡と思われる格円形の焚き火跡2ヶ所を検出した。また、道の前側には長さ約8m、幅約3mのテラスが広がり、横穴前方には石材が集積された長方形状の遺構を検出した。

・小横穴 小横穴は奥行き1.4m、奥側幅0.4m、前側幅0.6mの長方形プランで、高さは約0.7mあり、横断面形はドーム状を呈する。墓門には幅約5cm、深さ約5cmの蓋受けの割り込みが設けられている。また、他と異なり、墓道は無く粗略で小さい横穴に閉塞施設が設けられている。遺物も検出されなかったことから埋葬施設として使用されたかどうかは不明であった。

・焚き火跡 北側の焚き火跡は1.4×1.1m、南側の焚き火跡は0.8×0.6mの大きさの平面格円形ですり鉢状を呈する。床面は赤色に焼け、深さ数cmの炭化物が充填されていた。相当量火を焚いたものと考えられる。

・集石遺構 基盤層を長さ2.5m以上、幅1.35m、深さ1.0m掘り込んだ長方形状の遺構である。内部には人頭大の石材や数cmの破片が集積し、遺構の前方下斜面には投げ捨てられたような状態で同類の石材が多数散布していた。この石材は石棺及び閉塞用として使用されているカンラン石玄武岩であり、石棺及び閉塞用の石材をこの場所で加工したのではないかと思われた。

2. B区

小池奥B区では、横穴2穴が検出された。横穴は、南側の墳丘状の高まりに向かって7号横穴、約50m離れた北側の墳丘に向かって8号横穴が穿たれている。

7号横穴

・立地 丘陵西側斜面の南側墳丘下に掘られた横穴である。墓道前端部での標高は394.5mで、墳丘頂部より約8.0m下に穿たれ、西（S70°W）に開口する。

・墓道・前庭 墓道は現状で長さ2.2m、床面幅0.5～0.8m、上端幅0.9～1.6mで、墓門部方向に緩やかに上がる狭長なもので、墓門前での基盤層の掘り込みの深さは2.3mあり、墓道の断面はV字形を呈す。

・墓門・閉塞 閉塞は墓道前にカンラン石玄武岩の板状割石1枚によって閉塞されていた。墓門は幅1.0m、高さ1.0mで、床面には主軸方向に直交して長さ61cm、幅4cm、深さ4cmの溝が掘られている。

・墓道・玄室 墓道は長さ1.5m、墓門部で幅0.5m、高さ1.4m、玄門部で幅0.6mを測り、長方形の床面で、天井がドーム形をした墓道が玄室に付設する。玄室は、長さ2.5m、幅は、奥壁側で2.2m、玄門側で2.0m、高さ1.9mを測り、台形状の平面形をなす。また、奥壁には微妙に軒線が描かれ、天井の横断面形は擬似四柱式形を呈する。

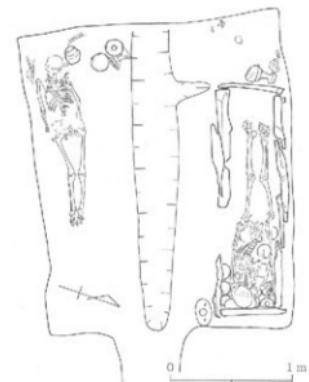


図11 7号穴

玄室右側には組合せの箱形石棺を安置する。石棺は内法で長さ1.8m、幅0.4mを測る。蓋石はほぼ同じ大きさの板石4枚からなる。側石は、左右とも各4枚、小口は各1枚で、深さ27~35cm、上面が揃うように床面の掘りくぼめた溝中に据えて固定している。石材はカンラン石玄武岩である。

・遺物出土状態 石棺内には前側を頭位にした人骨が1体で、壮年の男性。人骨の頭から腰にかけての床面には、枕として転用された須恵器蓋坏7組（№16~29）が伏せた状態で置いてあった。また、右腕横には鉄織5本（№2~6）、刀子（№1）が置かれていた。石棺外には提瓶1個（№7）、石棺と奥壁との隙間に短頭盞（№30）がのったハソウ（№31）、数枚を重ねた貝殻（カラス貝？）（№32）が置かれてあった。玄室右側には奥側を頭位にした人骨1体があり、青年期の女性とされた。副葬品には鉄織3本（№13~15）、小型盞（№11）、高坏3個（№8、9、10）があった。

8号横穴

・立地 丘陵西側斜面の北側埴丘下に掘られた横穴である。墓道前端部での標高は403.4mで、丘陵頂部より約6.8m下に穿たれ、南東（S47°W）に開口する。

・墓道・前庭 墓道は現状で長さ1.9m、床面幅0.3~0.4mで、狭門部方向に緩やかに上がる狭長なもので、狭門前での基盤層の掘り込みの深さは1.6mある。

・狭門・閉塞 閉塞は狭道前の狭門部で行われており、狭門は幅0.6m、高さ1.1mで、蓋受けの刺り込みははつきりしないが、床面には主軸方向に直交して長さ45cm、幅6cm、深さ4cmの溝が掘られている。閉塞は木蓋の類を溝に据え、刺り込みにはめ込んだものと考えられる。

・狭道・玄室 狹道は長さ1.6m、狭門部で幅0.4m、高さ1.1m、玄門部で幅0.8m、高さ0.7mを測り、長方形状の床面で、天井がドーム形をした狭道が玄室に付設する。玄室は、長さ1.9m、幅は、奥壁側で1.5m、玄門側で1.8m、高さ1.3mを測り、やや台形状の平面形をなす。天井の横断面形はドーム形を呈する。

・遺物出土状態 人骨は、玄室左側の奥を頭位に1体で、壮年後期の男性。頭部にベンガラが付着している。副葬品は、玄室内に鉄織6本（№1~6）、蓋坏6個（№7~9、11~13）、無蓋高坏1個（№14）と短頭盞の蓋1個（№10）が散在しておかれ、狭道に短頭盞1個（№15）、狭門前に坏蓋1個（№19）、坏蓋2坏身4個があった。

3.C区

A区と谷を挟んだ丘陵西斜面にあたるC区には、隣接して9号横穴、10号横穴があり、この2穴をC支群とした。

9号横穴

・立地 南に延びる東側丘陵の西側斜面に掘られた横穴である。墓道前端部での標高は389.9mで、南東（S81°W）に開口する。

・狭道・前庭 墓道は現状で長さ4.2m、床面幅0.6~1.1mで、狭門部方向に緩やかに上がる狭長なものである。

・狭門・閉塞 閉塞は狭道前にカンラン石玄武岩の板状割石4枚を組み合わせて用いている。狭門は幅0.7m、高さ1.1mを測る。

・狭道・玄室 狹道は長さ1.1m、幅0.5m、高さ1.0mを測り、長方形状の床面で、天井がドーム形をした狭道である。玄室は長さ2.0m、幅は、奥壁側で1.7m、玄門側で1.7m、高さ1.3mを測り、正方形に近い長方形状の平面形をなす。天井の横断面形は鈍いテント形を呈する。

・遺物出土状 玄室右側に前を頭位にした1号人（壮年男子）、左側に前を頭位にした2号人（小兒性別不明）が確認された。副葬品は1号人の枕に転用された蓋坏2組（№29~32）、右腕横に刀子1個（№11）があり、2号人の横には鉄織2本（№9、9'）があった。また中央奥には鉄織10枚本（№12~28）と高坏8個（№1~8）がまとまっ

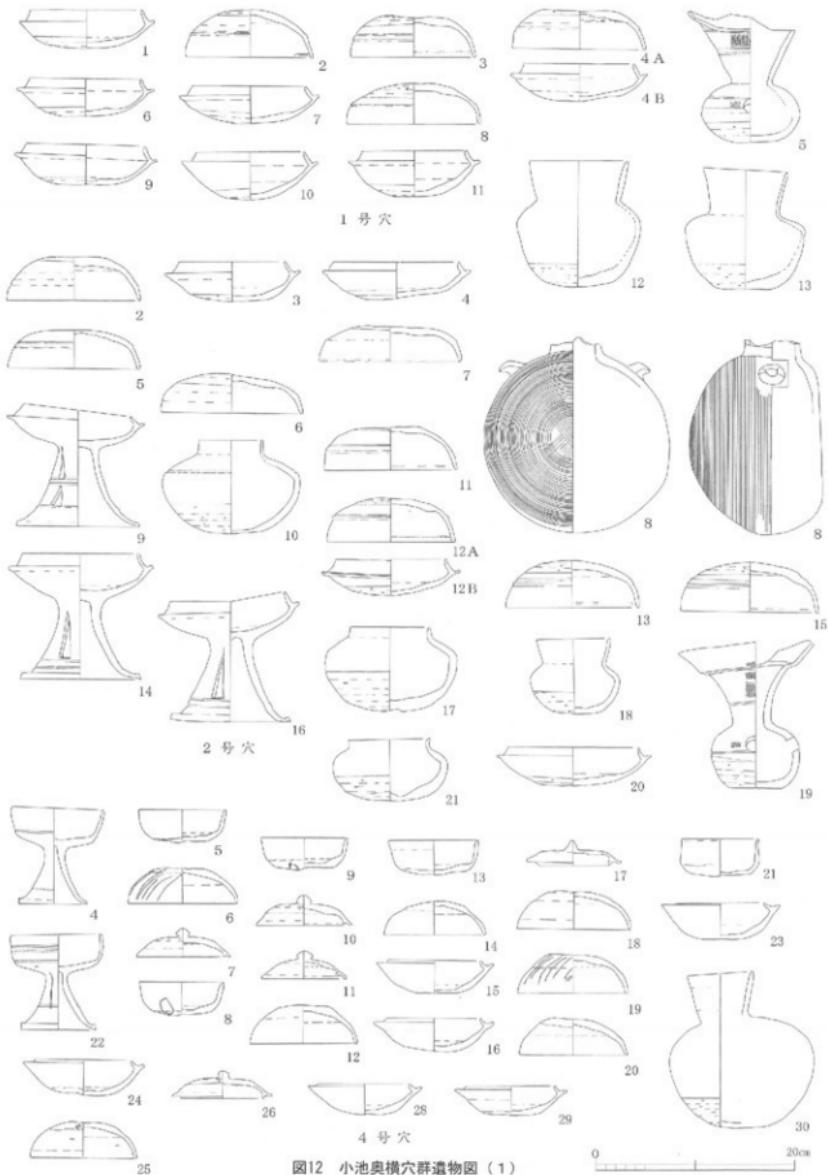


図12 小池奥横穴群遺物図(1)

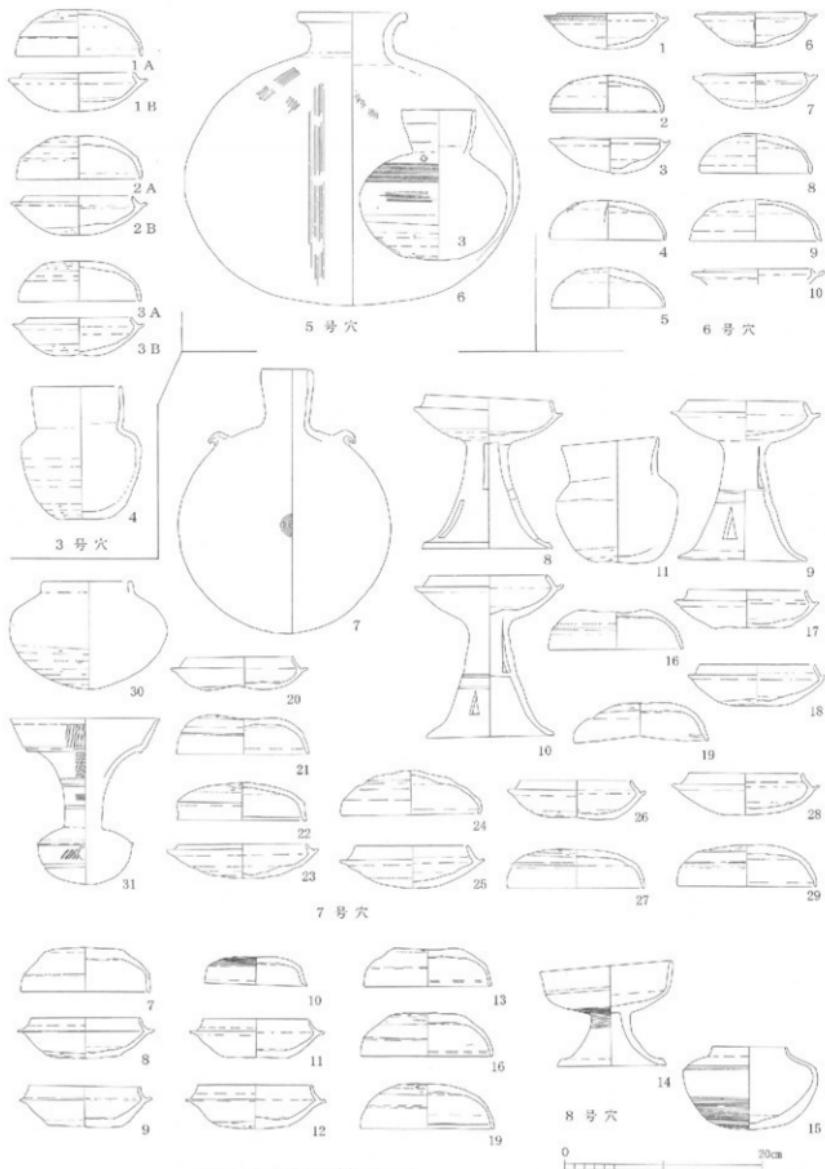


图13 小池奥横穴群遺物図（2）

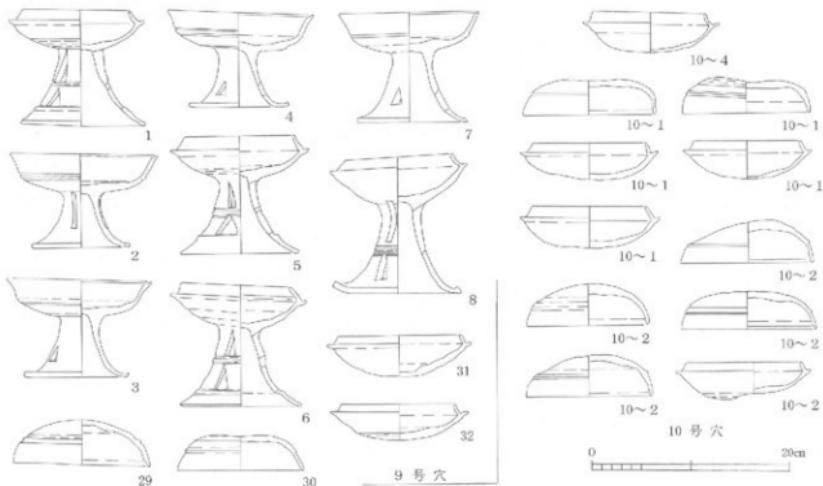


図14 小池奥横穴群遺物図（3）

て置かれていた。

10号横穴

- 立地 9号横穴の南隣に掘られた横穴である。墓道前端部での標高は387.4mで、南東（S 65° W）に開口する。
- 墓道・前庭 墓道は現状で長さ3.3m、床面幅1.0mで、羨門部方向に緩やかに上がる狭長なものである。
- 羨門・閉塞 閉塞は墓道前にカンラン石玄武岩の板状割石1枚によって閉塞されていた。羨門の大きさは基盤層がもろく崩れていたため不明である。
- 墓道・玄室 墓道は長さ1.4m、幅0.5mを測り、長方形状の床面で、天井がドーム形である。玄室は、長さ1.9m、幅は、奥壁側で1.7m、玄門側で1.9m、高さ1.4mを測り、正方形に近い長方形状の平面形をなす。天井の横断面形状は鈍いテント形を呈する。
- 遺物出土状況 玄室左側に頭位にした人骨1体（壮年男性）が確認された。副葬品は、玄室左側に鉄錐5本（No.1）、鉄鎌とみられる鉄製品（No.2）、刀子（No.3）、蓋環1個（No.4）が置かれ、また、墓道から蓋環数個体が出土した。

III まとめ

今回調査を行った小池奥横穴群は標高398～403mの頂部から約7～8m下りた丘陵斜面に穿たれ、この位置から横田盆地中央部が一望できる。横穴は2つの丘陵の3方の斜面から計11穴を検出し、横穴に関連する祭祀跡と考えられるものとして、小横穴、集石遺構、焼き火跡と丘陵上に2つのマウンドを確認した。

横穴群はその立地から3支群に分けられる。横穴の構造上の特徴としては、いずれも狭長な墓道をもち、玄室は長方形あるいは台形を呈す。天井形態は多くがテント形の妻入り三角断面形を呈するが、1号横穴・8号横穴はドーム形の丸天井形であり、7号横穴は四柱式妻入りの形態に近く、奥壁面には刻線によって境界を示す軒線が表現されて

いる。閉塞はいずれも蓋門部で行っており、7号横穴、9号横穴、10号横穴ではカンラン石玄武岩の板状割石によつて閉塞がなされていた。また4号横穴は蓋門部前に側壁石を据え、上に天井石を架ける門状構造がみられた。こうした方法は、鳥取県日野郡日南町、広島県比婆郡口和町、岡山県阿哲郡内に分布する閉塞施設のようである。埋葬施設としては、須恵器床をもつ5号横穴と箱形石棺を有する7号横穴がある。閉塞や石棺に使われている石材のカンラン石玄武岩は打撃を加えると薄く剥離しやすい性質をもつ。埋葬人員については、横穴によって骨の保存状態の良いものと悪いものがあり、確かな数は不明であるが、1～3体分の埋葬がそれぞれ確認された。また、4号横穴については散体分の人骨が集骨状に検出された。また人骨の鑑定結果は別記のようである。

副葬品としては、管玉、勾玉の玉類、耳環と豊富な鉄製品が出土した。鉄製品では、鐵鎌がもっとも多く、その他に刀子、鐵鎌、鉢がみられた。また特異な副葬品としては7号横穴から貝殻が検出された。

この横穴群の造営は山上上器等からみて、6世紀後半に始まり7世紀末まで続いたと考えられる。

天狗松横穴群

I 調査に至る経緯

天狗松横穴群は、周知の埋蔵文化財として『島根県遺跡地図 I (出雲・隱岐編)』(島根県教育委員会編: 1987. 3) 等に登載され、1穴(1号横穴墓)のみが以前から地元の人々に知られていた。今回、国営農地開発事業横田II-4団地農地造成工事にともない、昭和63年12月より1号横穴墓の発掘調査を実施した。ところが、調査期間中新たに横穴墓や丘陵尾根上に祭祀跡と思われる場所が発見され、引き続き平成元年1月から順次それらについて調査を行った。

1. I支群

1号穴

大正年間には開口していた(『横田町誌』1968. 9)といふ横穴で、丘陵頂部から約6m(標高約388m)の南向き丘陵斜面に穿たれている。現状は側壁、天井部の崩壊が著しく床面の他はほとんど原形をとどめていない。

玄室は、平面はほぼ長方形で、長さ2.00m、最大幅1.75mで、天井の形態は、四柱式三角断面形妻入り形と推定。

羨道は、長さ1.25m、幅0.4mで、玄室のやや左寄りに付設する。

遺物は、今回の調査では、何も発見できなかったが、大正9年に採取された須恵器(無蓋高坏4、有蓋高坏4、蓋坏/蓋3、身14)が横田小学校に保管されている。須恵器の時期は、山本清氏による山陰の須恵器編年でいう第Ⅲ期に相当する。

2号穴

1号横穴墓から丘陵を北へ回った標高約391m(頂上からの比高約5m)の東向き丘陵斜面に穿たれていた。工事用仮設道路を付設中、遺物の出土により横穴墓の存在がわかったもので、発見時には既に重機によって削られ、奥側の床面の一部を除いてはほとんど破損し、擾乱土中から土師坏蓋、須恵坏等が採取された。

3号穴

1号横穴墓から北西に回った丘陵西斜面の標高約387mに穿たれており、4号横穴墓の南東に隣接する。

未開口であったもので、玄室内は右天井部が多少崩落していたが全体的には保存状態は良好であった。玄室の規模は、長さ3.1m、最大幅1.70m、高さ1.10mで、天井の形態は四柱式三角断面形妻入り形呈する。床面には、人骨の一部が残存し、奥部に頭蓋骨がみられ、玄門部に歯が数点検出されたことから、2体以上は埋葬されていたと考えられる。またカンラン石玄武岩の板石が3枚検出され、遺体の頭部や足部が置かれ、屍床として用いられていたと考え



図15 天狗松横穴群地形図

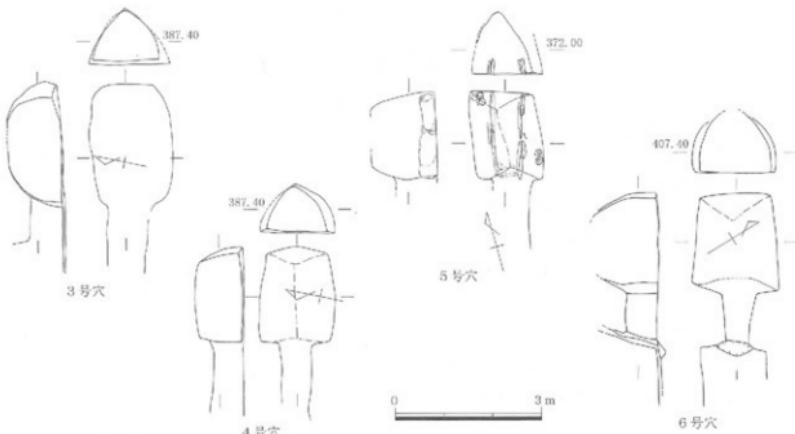


図16 天狗松横穴群

られる。羨道はやや幅広で長さ1.2mである。また、墓道からは10数個の自然石（川原石）の大石が出土しており閉塞用に用いたものと思われる。

遺物は墓道及び前庭部から須恵器横瓶1、同平瓶1、同蓋杯身1、同壺片多数が出土した。玄室内には鉄製大刀1（№28）、倒卵形の鎧1（№36）、鉄鏃2（№54.61）刀子？1（№41）、無蓋高杯7（№15.19.20.22.27.37）、ハソウ2（№21.53）、平瓶3（№23.24.26）、蓋杯6（№10.14.16.17.18.63）と須恵器類が多数副葬されていた。出土須恵器の時期は山陰の須恵器編年第IV期（旧）に相当する。

4号穴

3号横穴墓に隣接し穿たれている。3号墓と同様に未開口だったので、横穴の保存状態は極めて良好であった。玄室は長さ1.98m、最大幅1.58m、高さ1.02mで、天井の形態は四柱式三角断面形妻入り形を呈する。羨道は長さ1.67m、幅0.62m、高さ0.62m、玄室の中央に付設する。

玄室内左半分には、須恵器壺片を床に敷き屍床としており、また頭部にあたると思われるところには、須恵器蓋3個（№7.9.11）を置き枕としている。この同一個体の壺片は、前庭部ないし墓道からも出土しており2個体分が確認された。墓前祭祀の際前庭部で割り、その一部は玄室内的屍床として用い、その他は前庭部にそのまま廻棄したものと考えられる。

その他の遺物としては、玄門部の左側隅に土師器壺1（№1）、右隅に須恵器壺1（№48）が出土した。出土須恵器から、時期は山陰の須恵器編年第IV期（新）に相当する。

2. II支群

祭祀跡

横穴群の北西丘陵上に位置する。丘陵尾根を長さ約12m、幅約8m以上にカットし平坦面が形成されている。地山に掘り込まれた多数の柱穴跡が検出され、少なくとも2棟の掘立柱建物跡が確認された。その内丘陵奥側の1棟は、4.0×2.5mの大きさで、南側には長さ5m、幅0.2m、深さ0.2mの溝が掘られている。中央には95×65cmの炭が混在

したピットが検出された。

遺物としては、須恵器の壺片、土師器高坏、甕などが出土した。

5号穴

5号穴は祭祀跡の下方約7m、標高376mに在り、工事により渓道から前方と玄室天井が失われて発見された。玄室は幅1.3m、奥行1.8mでやや菱形気味であり、断面三角形妻入りでその中央に板石と組んだ箱式石棺を奥側を小口を利用して造って埋葬し、蓋石をしている。石棺内は壺片を敷いた土器敷で、被葬者は壯年男性1人（身長161cm）前方を頭位とし、朱色が認められ、蓋坏（No.111）を枕にしている。副葬品はすべて石棺の外で、向かって左奥にまとめて置かれ、須恵蓋坏2組と長頸壺や高坏（No.122～127）、右中ほどに刀子（No.121）、右前方に長頸壺（No.119, 120）が、また玄門部あたりに蓋坏各2（No.128～131）が置かれていた。

（なお、この横穴と前記した後背墳丘上の祭祀跡との関係は明確ではないが、埋葬後の墓上祭祀も考えることができよう。）

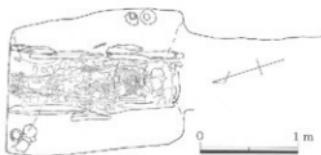


図17 天狗松5号横穴玄室内

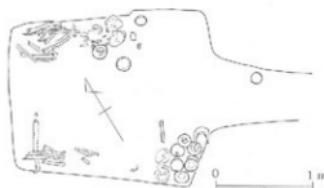


図18 天狗松6号横穴玄室内

3. III支群

6号穴

6号穴は5号穴や祭祀跡の北隣り支尾根の尖端に近く、群中最も高位置にあり、南東方向に開口する横穴で標高約410mである。上方に後背墳丘をつくっていたとみられるが、工事で消滅していく明らかでない。

工事中、前庭の大部分と玄室天井の破損によって発見された。玄室は奥幅1.5m、前幅1.7m、奥行2.0mのやや台形をなす整形で断面はふくらみのある三角形をなす。渓道は奥が広く平天井で、長さは1.0mで板状の閉塞とみられ奥門に削り込みをつくっている。

玄室内左奥には大刀1個（No.23）が側壁に鋒を当て斜めに置かれていて、経時変化により弯曲して床に接している。そしてその上と付近に大腿骨等の長管骨が10本余り集骨状に重なっており、玄門左脇欄には高坏や蓋坏（No.12～15, 17～20, 25）動先（No.21）や大刀破片（No.22）がまとめて置かれ、それに接して頭骨2体分（壯年男子と小兒）があつた。右奥から右中ほどにかけて2体の人骨（男女で各々壯年）が集積されていた。またこれに接する右中ほどには耳環（No.1）、メノウ勾玉5（No.2～5, 7）、水晶勾玉1（No.6）、鰐（No.8）、蓋坏・高坏（No.9～11）が置かれていた。また、渓道中ほどには环1個（No.24）が置かれていた。

なお6号穴から北東へ下降延長する尾根にはマウンド状地形が点在することから未発見の横穴墓が存在するものと思われる。

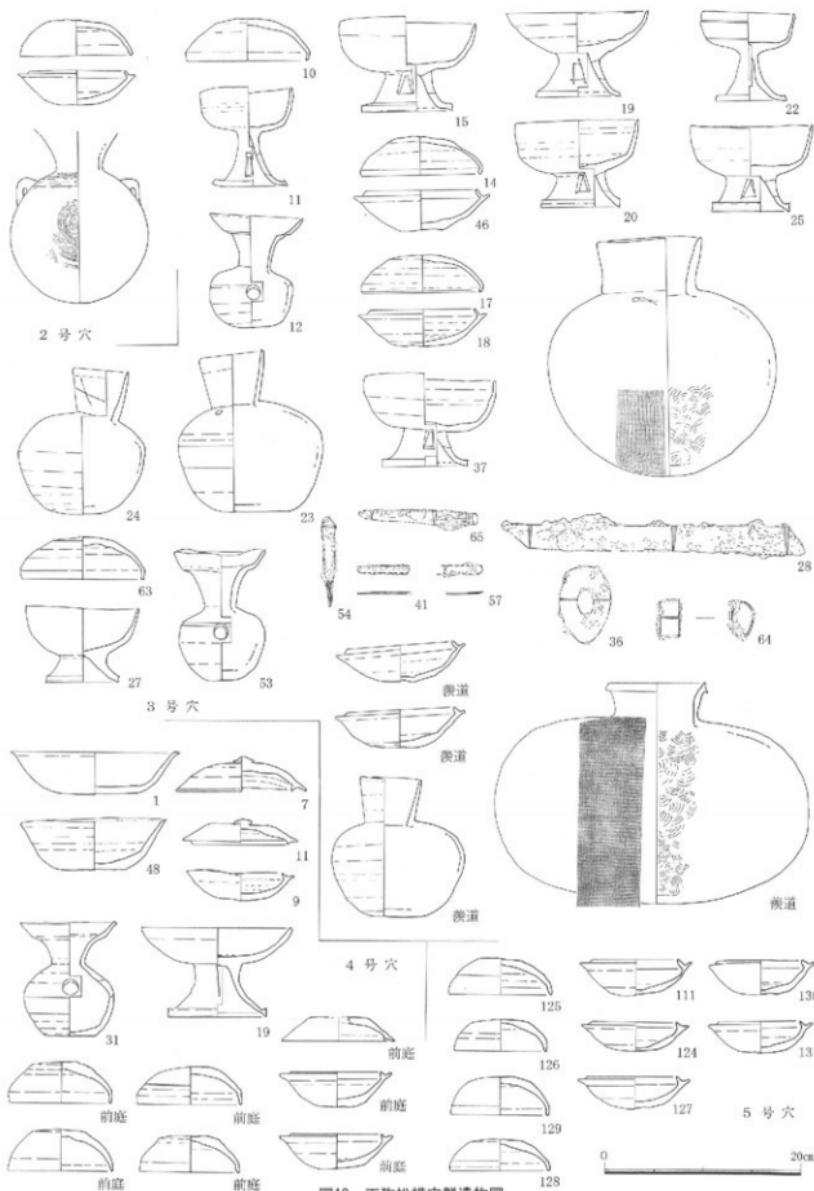


圖19 天狗松橫穴群遺物圖

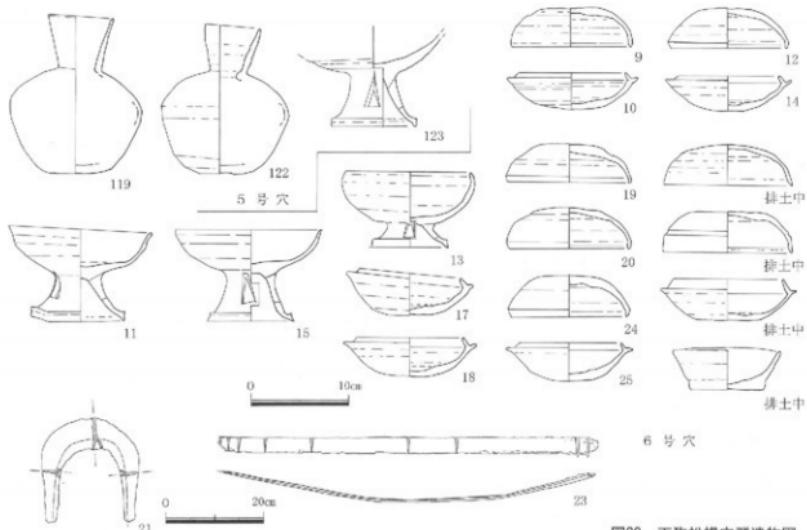


図20 天狗松横穴群遺物図

II まとめ

天狗松横穴群は横田の町並みの西方約800m、比高60~100mほどの高い山腹に点在するもので、支尾根によってⅠ~Ⅲ支群に分けられる。古く開口していた1号穴から4号穴までをⅠ、5号穴と祭祀跡をⅡ、6号穴とそれに続く未調査マウンド群がⅢである。各穴の相互関係は明らかでないが、内容の様子から3~6号についてみると、土器からみて3号穴が最も早く、6世紀後~末に始まり、鉄器が認められ、4号穴では土師壺を含むなど7世紀後半とみられる。5号穴は後背墳丘上に削平した祭祀面があり、殯も想われ、5号穴内には箱式石棺を組み、須恵器は7世紀前半の品である。最も高所に位置する6号穴には大刀、鷲先など豊かな鉄器があり、土器は7世紀初頭にあたる。このようにⅠ~Ⅲ支群は間隔があり、それぞれ別単位の造営であろうか。いずれも眼下間に横田盆地中心地を一望する立地である。

補記

I・II支群麓の川沿い地は通称「木舟」と呼ばれ、橋や渡名になっている。当地において「木舟」は「貴布祢」の当て字で、中世後半以降、京都から招請し庄頂に祠をつくり、雨乞いや雨止み等水に関わる神事を行っていた。『冥陽誌』によると、下横田村の川西地内に“貴布祢社あり”の記述があるが、以降の記録はなく、伝承も途絶えて、今はその場所は不明である。しかし地名等から天狗松横穴群付近に該当するかとも思われ、特に5号穴上の祭祀跡は、その最も有力な位置といえよう。すると、この“祭祀跡”とした遺構は高麗命を祀る貴布祢社そのものである可能性もあり、さらに検討が必要である。

杉原 補記

滝ノ谷尻横穴

I 遺跡の環境と調査に至る経緯

滝ノ谷尻横穴は、横田盆地の南端に当たる大字稻原の南から張り出す丘陵にあり、標高414mの谷間に面した南東斜面上方に立地する。平成元年1月この横穴は、森林開発公団が行う大規模林道横田工区工事によって半壊状態で発見された。付近には、東方約400mに白石迫古墳があったが、農地開発によって消滅した。なお、当該横穴の南東約50mにも新設林道法面に横穴の前部かと思われる落ち込み上の部分が認められることから、付近にはさらに横穴が存在する可能性が高い。横田盆地を囲む丘陵には、数多くの古墳やその他の遺跡が知られており、弥生時代以降この地に多くの人々が生活していた地域である。

調査は林道工事に伴い、その事業主体者の依頼により破損した横穴の埋葬人骨を含む残存部分について、横田町教育委員会が実施したものである。

II 遺跡の概要

丘陵を横断する林道敷設工事の法切り部において発見された横穴は、玄室部分の約1/3程と、羨道部分のすべてが失われていた。南を玄門とする玄室内には東寄りに簡易な箱式石棺があり、この石棺内には3体の人骨が、棺外の玄室西寄り床面には数人分の人骨がそれぞれ納められていた。遺物は石棺内では頭枕とした須恵器の坏身が1点あり、また玄室内奥門近くには平瓶が副葬されていた。

1. 横穴のプランについて

堅い花崗岩質真砂土の地山に掘り込まれた横穴の玄室は張りのある断面三角形テント型で妻入りのタイプである。幅1.45m奥行1.95mのやや整った床面で、高さは剥落のため測定できなかつたが、約1.25m程とみられる。奥壁もほぼ同様で、強く内傾している。壁面の残存部分は少ないが、掘削痕は頗著でなく、丁寧に仕上げている。玄門～羨道部については損失のため不明であるが、旧地形から見て前庭部は長いと思われる。玄室内の中央から向かって右側にはカンラン石玄武岩で厚さ5～10cmほどの板状石を用いた簡単な箱式石棺がしつらえてある。左右の側壁石は各2枚、小口は1枚を用い、蓋石は4枚を用いている。蓋石等には粘土などによる目張りは認められない。石棺は内法で幅46～32cmであり奥側が広い。長さは玄室長ほぼいっぱいの170cmである。

なお横穴の主軸方向はS 58.5° Eである。

2. 人骨について

被葬者は石棺内に3人、石棺外の玄室に数人を残存骨によって知ることができる。特に石棺内は保存状態が良好である。これらの人骨については鑑定を井上亮孝先生に依頼して行った。その現場の取り上げ時所見は概ね次のようである。

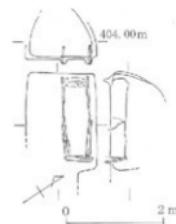


図21 滝ノ谷尻横穴

- a. 石棺内 I ~ III号人について
- △ I号人 壮年男性 身長150cm前後 初葬。
 - △ II号人 壮年女性 身長145cm 右足が膝から折り返されている。追葬。
 - △ III号人 性別未詳、小兒 最終の追葬か。
 - △さらばに上記以外の先葬者とみられる下顎及び上腕骨が遺存した。
- b. 石棺外の人骨について
- △主として長管骨が集骨されている。
 - △頭骨、下顎骨から2人以上が推定される。
 - △男女ともに認められる。

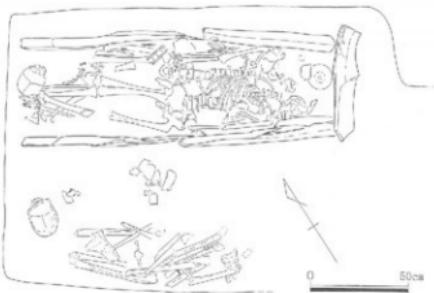


図22 滝ノ谷尻横穴玄室内

3. 副葬品について

副葬品は乏しく、若干の須恵器のみであった。石棺内ではII号人の頭骨片の下に須恵器の壺身1個のみを検出した。これは枕に転用されたもので、器径12.8cmを測り、蓋の受け部の立ち上がりが短く強く内傾する器姿であり、山陰での幅年のIV期に相当する。

棺外では漢道に近い玄室内で平瓶1と若干の須恵焼片が残存した。

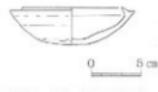


図23 滝ノ谷尻横穴出土土器

III まとめ

1. 当該横穴は工事により破損しているが、この地方に通有のプランである三角テント型入り口のもので家形の便化したものであり、玄室の規模はやや小型である。
2. 副葬又は用いられている土器から大まかに古墳時代終末期に近い頃に営まれたものであろう。
3. 被葬者は5人以上に及ぶものと思われる。
4. 横穴の第1被葬者は特定出来ないが、男女複数の被葬者の遺骨を玄室に向かって左側に集骨し、右側に寄せて石棺を設置してさらに追葬したものであろう。
5. 石棺内では、男性かとみられるI号人が須恵器壺身を枕に初葬されている。
6. II号人(女)とIII号人(小兒)との追葬の前後関係は明確ではないがII号人の下肢骨上にIII号人の頭蓋が重なっていることからIII号人が最終追葬かと思われる。
7. 付近には白石追古墳のほか、極く近い位置にも横穴の存在が推定されるなど、さらに複数の遺跡がある可能性が強い。

付編 I

横田町小池横穴群出土人骨

井上晃孝

小池横穴群は鳥取県仁多郡横田町大字中村字岩屋寺に所在する。

本横穴群は2群から成り、北側墳丘を1号墳丘、南側墳丘を2号墳丘とした。

それぞれの墳丘に対する横穴を1-1号穴、2-1号穴、2-2号穴と2-3号穴と呼称した。

この横穴群からの出土人骨は5体で、骨の遺残性は全般的に不良であった。

出土人骨の取り上げは、調査担当者の吾郷和宏氏によりなされ、後日筆者が鑑定に当った。

各横穴毎の出土人骨について、その概要を報告する。

本文中の歯牙については、次の略記で示した。

○：釘齒歯牙 △：遊離歯牙 ●：埋伏歯牙 □：生前欠（歯槽閉塞） ×：死後欠（歯槽開放） ／：不明

□：欠損部位 1～8：永久歯 △～E：乳歯 C：齶歯（虫歯）

最後に、各横穴毎の出土人骨（被葬者）数、その性別、年令、身長の概要を本文末に付表としてまとめた。

1号墳丘

1-1号穴

玄室左側に人骨が若干遺残していた。

被葬者は頭位を玄室左側奥部にして、左側入口側に向って仰臥伸展位で埋葬されていた。

遺残骨は若干で、脆弱化していた。

被葬者の頸頭部周辺から、玉類が多数出土した。

1) 骨の遺残性

遺残骨は若干で、脆弱化しており、遺残性はきわめて不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：頭頂骨、側頭骨（顎体部）、頭蓋底骨の1部（大後頭孔とその周辺骨）、その他頭骨片 若干

下顎骨：かろうじて原形を保っていたが、脆弱化著しく採取時崩壊、歯牙（-）

歯牙：	遊離歯牙 2ヶ	△	—	△	—
		5		5	

脊椎骨 頸椎骨：第1頸椎骨：上関節面

第2頸椎骨：歯突起部

3) 推定性別

遺残頭蓋骨の形態学的特徴と歯牙の歯冠径から推察すると、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

頭骨の頭蓋縫合の一節と歯牙の咬耗度から、本屍の年令は青年期位が推定される。

5) 推定身長

遺残骨に、完形の四肢骨が全くないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

特記事項として、被葬者の頭頸部周辺部から、玉類（勾玉、算盤玉、平玉、丸玉、小玉、管玉）が多数検出された。

7) まとめ

1-1号穴の玄室左奥部を頭位にして、左手前の入口側に向って、被葬者1体が仰臥伸展位で埋葬されていた。骨の遺残性はきわめて不良であった。
被葬者は男性、推定年令は青年期、推定身長は不詳である。
木屍の頭頸部の周辺部から、玉類が多数検出された。

2 号 墳 丘

2-1号穴

玄室の中央奥部に須恵器を枕にして、頭骨片と歯牙4ヶが出土した。
遺残頭骨片は未熟で、脆弱化していた。

1) 骨の遺残性

遺残骨は頭骨片と歯牙（永久歯、乳歯混在）4ヶで、未熟骨で脆弱化していた。
骨の遺残性はきわめて不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：前頭骨、左頭頂骨の一部、右側頭骨（蝶体部）

歯 牙：遊離歯牙（歯冠部のみ）4ヶ

6 E	E
△ △	△
	5
	△
	●

3) 推定性別

遺残骨は頭骨片と歯牙（永久歯と乳歯）のみで、明らかに小児で、性別は不詳である。

4) 推定年令

遺残歯牙の萌出状態から、乳歯（第2乳臼歯：E）があり、永久歯の第1大臼歯（6）は恐らく萌出、第2小臼歯（5）は恐らく埋伏歯であったと推察される所から、木屍の年令は10才前後の小児が推定される。

5) 推定身長

遺残骨は頭骨片と歯片のみで、完形の四肢骨がないので、木屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

木屍骨は未熟骨で、骨の遺残は少くない。

しかし、硬組織の中で最も硬い歯牙が遺残、永久歯と乳歯が混在して検出されたことは、被葬者の年令を特定するのに、幸運であった。

7) まとめ

2-1号穴の玄室中央奥部に頭骨片と歯牙が若干遺残、骨の遺残性はきわめて不良である。
被葬者は性別不詳の小児で、年令は10才前後位、身長は不詳である。

2-2号穴

玄室内には、左右に被葬者1体ずつが埋葬されていた。いずれも頭位を入口側にして、奥に向って仰臥伸展位で埋葬されていた。

玄室左側の人骨を1号人骨、右側の人骨を2号人骨とした。

被葬者2体とも、骨の遺残性は不良であった。

1号人骨

1) 骨の遺残性

遺残骨は頭部、脊椎骨と上下肢骨が若干遺残していたが、破損骨で骨の遺残性は不良であった。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：前頭部、頸頂部、側頭部、後頭部、顎面～上顎部、頭蓋底骨（脆弱化）

下顎骨：右の下顎体（下顎枝欠）

歯 牙：	○ ○	△ △ △ △	△ △ △
	/ 7 6 □ 4 3 2 1		1 2 3 □
	□ 7 □ □ 4 3 2 1 □		
	○	○ ○ ○ ○	

脊椎骨 頸椎骨：第1頸椎骨（右上関節面のみ）

上肢骨 上腕骨：右；骨体中央部（骨片化）

下肢骨 大腿骨：左；骨体中央部～下端部 右；骨体中央部～下端部

脛 骨：左；近位部～骨体中央部 右；近位部～骨体中央部

腓 骨：左；骨体の一部

3) 推定性別

遺残する頭骨の諸形態学的特徴と下肢骨の筋付着部の粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

頭骨の頭蓋冠縫合の程度は不明、口蓋縫合の切歯縫合は完全融合、正中口蓋縫合の口蓋骨部は下1/3が融合、頭蓋底部の蝶後頭軟骨結合は完全融合、歯牙の咬耗度は切歯がプロカーブの2度であるので、本屍の年令は壮年期位が推定される。

5) 推定身長

遺残する四肢骨は完形骨でないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨は脆弱化しており、完形骨でないので、特記事項はない。

7) まとめ

2-2号穴の玄室左側人口側に頭位をおき、奥部に向って仰臥伸展位で埋葬されていた。

骨の遺残性は不良であった。

被葬者は男性、年令は壮年期位、身長は不詳である。

2 号 人 骨

1) 骨の遺残性

道残骨は頭骨、下頸骨、脊椎骨の一部、下肢骨があるが、本熱骨で脆弱化しており、変形骨はない。

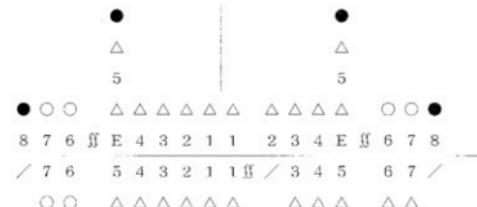
旨の遺残性はきわめて不良である。

2) 遺歿骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：大きく損壊 前頭部、頭頂部、左右の側頭部（錐体部）、上顎骨、頭蓋底部（後頭頸部）

下頸骨；右下頸體

齒 牙：



脊椎骨 類椎骨：第 1 類椎骨（上關節面部）

第2腰椎骨(椎突起部)

下肢骨 大腿骨：左；骨体 骨片化 右；管体 指壤

胆、管、左、管体、管片化

3) 推定性别

遺傳性は未熟骨で完形骨がなく、小脛骨であるので、性別は不詳である。

4) 推定年会

遺残骨は細く、小さく未熟骨である

歯齒の歯には乳歯と永久歯が混在しており、歯牙の抽出状態からして、本屋の年齢は10~12才位が推定される。

5) 離家原因

遺残する四肢骨が弓形骨がないので、本属の生前の身長は5メートルである。

6) その他の

遠戸堂は歴史的価値があるが、歯牙はかなり壊しておらず、小屋の年輪推定が可能であった。

3) 康文迪

2-2 景穴の玄室左側人口側に頭位をおき、奥部に仙尾位で切妻されていた

被覆者は小児で未動骨のため、骨の塑形性はきわめて不自由である。

被葬者は性別不詳の小児で、年齢は10～12才位。身長は不詳である。

2-3号穴

玄室の左側壁際最奥部に須恵器の土器2ヶを枕にして頭位があり、左壁に沿って左手前に足位をおく1体が仰臥仲間位で埋葬されている。

1) 父の遺残性

遺骸骨の配置から、かろうじて仰臥位屍位が推定された。遺骸性は空形性ではなく、他の遺骸性は 아니다。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：顔面部～前頭部にかけて大きく欠損、頭頂部～後頸部、左右の側頭部、上顎部、頬蓋底部の一部

下顎部：正中部で折損、左下顎枝欠

歯 牙：

	c ₃	c ₂		c ₂		c ₂
△	.○	r ○ ○ ○		○ ○	r ○ ○ ○ ○	
8 × ×	5 4	3 2 1		1 2	3 4 5 6 7 ×	
□ □ □	4 3	2 1		1 2	ff × 4 5 □ □ □	
	○ ○ ○ ○			○ ○	○ ○	

脊椎骨 頸椎骨：No.1～6（1；後弓部欠、2～6；棘突起、椎弓板欠）

胸椎骨：1ヶ、No.不明の椎体部

胸郭骨 肋骨：左；肋骨片6ヶ

上肢骨 鎖骨：右；骨体、骨片化

上腕骨 左；骨体、骨片化 右；骨体、骨片化

下肢骨 大腿骨：左；骨体中央部、骨片化 右；骨体中央部、骨片化

脛骨：左；骨体中央部、骨片化

3) 推定性別

頭骨の諸形態学的特徴、四肢骨は細く、華奢、歯牙の歯冠径も小さいので、本屍骨は女性骨と推定する。

4) 推定年令

頭骨の顎蓋冠縫合は矢状縫合では大きく離開、人字縫合は未融合である。

口蓋縫合の切歯縫合の外側部は完全融合、内側部は未融合、正中口蓋縫合の口蓋骨部は未融合である。

歯牙の咬耗度をみると、上下顎の切歯はプロカーの1度、臼歯もプロカーの1度である。

以上から、本屍の年令は、壮年中期（20代後半）位が推定される。

5) 推定身長

遺残骨に完形の四肢骨がないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨を見る限り、特記事項なし。

7) まとめ

2～3号穴の玄室左奥を頭位にして、仰臥伸展位で1体が埋葬されていた。

骨の遺残性は不良である。

被葬者は女性、年令は壮年中期位、身長は不詳である。

考 察

1. 骨の遺残性

出土人骨の遺残性は、遺体の安置された環境（とくに土質）に大きく左右される。

一般的には、乾燥性（排水）のよい土質や砂地では骨の遺残性がよく、粘土質や酸性土質では骨の遺残性は極端に悪い。

島根県では、雲南地方の横田町¹⁾、仁多町²⁻⁴⁾、三刀屋町⁵⁾からの横穴墓の出土人骨は、骨の遺残性が良好で、末梢骨まで遺残することが多い。

それに反して、東部～西部の出雲地方⁶⁻¹⁰⁾の横穴墓からの出土人骨は、一般的に骨の遺残性は悪く、遺残骨も若干で破壊骨～骨片化しており、性別、年令と身長が不詳のものが多い。

これは、雲南地方の土質が前者に属し、出雲地方の土質が後者に属することに起因する。

しかし、雲南地方の横田町でも、地区によっては土質により、骨の遺残性に差がみられた。

小池奥横穴群¹¹⁾からの出土人骨（21体）は、遺残性が比較的良好なものから不良のものまでみられた。全般的には、不良であり、埋葬された痕跡（副葬品の須恵器土器）があるにもかかわらず、人骨が消失していた。消失した人骨は、未熟骨の小児がかなり含まれているものと推察されたが、中には成人域の骨も遺残が悪かった。

小池奥横穴群に隣接する小池横穴群は同地内であるが、さらに骨の遺残性は全般的に不良であった。そのため、被葬者（出土人骨）5体は、かろうじて性別、年令は推定したが、完形の四肢骨がないので、生前の身長は5体すべて不詳であった。

2. 副葬品

小池横穴群の4穴からの出土副葬品は、いずれの横穴からも須恵器の土器が検出された。

しかし、特記事項として、1-1号穴の副葬品は、須恵器土器の他に、他の横穴ではみられなかった玉類が多数検出された。

同穴の被葬者は1体で、骨の遺残性はきわめて不良であったが、青年期の男性であった。

被葬者の頭頸部周辺部から、勾玉、算盤玉、平下、丸玉、小玉、管玉が多数検出された。

被葬者は若年者（青年期）でありながら、小池横穴群の中でも、最も厚葬であり、生前かなりの有力者であったことが伺えた。

横田町の横穴からの出土品としても、特記に値する。

要 約

島根県横田町大字中村字岩屋寺に所在する小池横穴群は2群から成り、北側墳丘を1号墳丘、南側墳丘を2号墳丘とした。

それぞれの墳丘に対応する横穴を1-1号穴、2-1号穴、2-2号穴と2-3号穴と呼称した。

この横穴群からの出土人骨は5体、内訳は男性2体、女性1体と小児2体であった。

男性の年令は青年期1体、壮年期1体である。

女性の年令は壮年中期1体、小児の年令は10才前後と10才～12才位1体である。

出土人骨5体の身長はいずれも不詳である。

特記事項として、1-1号穴の被葬者（青年期の男性）の頭頸部の下部から、多数の玉類が出土した。

文 献

1. 井上亮孝（1994）：横田町宮ノ姉横穴墓出土人骨について、角・宮ノ姉横穴、柏原遺跡発掘調査報告書、14-25、島根県横田町教育委員会

2. 井上晃孝（1984）：上分中山1号横穴墓内の人骨鑑定、上分中山横穴群調査報告書、島根県仁多町教育委員会
3. 井上晃孝（1991）：川子原横穴墓の人の骨について、島根県埋蔵文化財調査報告書第XVII集、43-52、島根県教育委員会
4. 井上晃孝（1992）：コフケ横穴出土人骨の概要、島根県埋蔵文化財調査報告書第XVIII集、21-26、島根県教育委員会
5. 井上晃孝（1984）：東下谷横穴群出土人骨について、東下谷横穴群発掘調査報告書、30-48、島根県三刀屋町教育委員会
6. 井上貴央・井上晃孝（1983）：黒鳥2号横穴の人の骨について、黒鳥2号横穴発掘調査報告書、14-19、安来市教育委員会
7. 井上晃孝（1984）：高広遺跡横穴墓より出土の人の骨について、高広遺跡発掘調査報告書、195-204、島根県教育委員会
8. 井上晃孝（1997）：島田池遺跡1、4調査区横穴墓出土人骨について、島田池遺跡・鶴賀遺跡（本文編）、252-273、島根県教育委員会
9. 井上晃孝（1995）：波山池古墳群IV区横穴墓群出土人骨、波山池古墳群、163-187、島根県教育委員会
10. 井上晃孝（1994）：菅沢谷横穴群出土人骨について、文化財調査報告書第3集、菅沢谷横穴群、65-74、松江市教育文化振興事業団
11. 井上晃孝（1995）：舟津横穴群出土人骨について、文化財調査報告書第58集、舟津横穴群発掘調査報告書、15-19、松江市教育文化振興事業団
12. 井上晃孝（1995）：筆ノ尾崩1号横穴出土人骨について、文化財調査報告書第57集、筆ノ尾横穴群発掘調査報告書、39-50、松江市教育文化振興事業団
13. 井上晃孝（1984）：貝塚横穴群出土の人骨について、御津貝塚横穴群発掘調査報告書I、37-42、島根県鹿島町教育委員会
14. 井上晃孝（1983）：出土人骨鑑定、平野遺跡群発掘調査報告書I、30-38、島根県斐川町教育委員会
15. 井上晃孝（1984）：出土人骨鑑定、平野遺跡発掘調査報告書II、53-59、島根県斐川町教育委員会
16. 井上晃孝（1994）：地蔵堂横穴墓第2支群の出土人骨、地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書、36-40、出雲市教育委員会
17. 井上晃孝：横田町小池奥横穴群出土人骨（投稿中）

付表 横田町小池横穴群出土人骨一覧

古 墳 群	被葬者数	推定性別				推定年令	推定身長	備 考
		男	女	児	不明			
1号	1号穴	1	1			♂：青青春期	♂：不詳	頭頸部：玉類多數
	1号穴	1		1		児：10才前後	児：不詳	
2号	2号穴	2	1	1		♂：壮年期 児：10~12才位	♂：不詳 児：不詳	
	3号穴	1		1		♀：壮年中期	♀：不詳	
2	4	5	2	1	2			

付編 II

横田町小池奥横穴群出土人骨

井上 晃 孝

はじめに

小池奥横穴群は島根県仁多郡横田町大字中村字岩屋寺に位置する。

小池奥横穴墓群は3区から成り、A区7穴（1～6号穴、11号穴）、B区2穴（7、8号穴）とC区2穴（9、10号穴）の計11横穴である。その内、人骨が出土したのは9横穴である。

本横穴墓群の出土人骨の遺残性は、1号穴、2号穴と7号穴はかなり良好で、末梢骨まで遺残していた。しかし、他の横穴の出土人骨の遺残性は全般的に不良であった。

本横穴群出土人骨数は21体で、男性8体、女性7体、小児5体と性別不明1体である。

以下、各横穴墓毎に 1) 骨の遺残性 2) 遺残骨名とその部位 3) 推定性別 4) 推定年令 5) 推定身長
6) その他について概要を報告する。

本文中の歯牙の記載は下記に従った。

○：釘植歯牙 □：生前欠（齒槽閉塞） △：遊離歯牙 ×：死後欠（齒槽開放） ●：埋伏歯牙 ∟：欠損部位
τ：歯根のみ C：齶歯（C₁, C₂, C₃, C₄） ／：不明 1～8：永久歯 A～E：乳歯

最後に、各横穴墓毎の出土人骨（被葬者）数、推定性別、推定年令、推定身長らを付表にまとめた。

1号穴

玄室内には、3体が仰臥仰屈位で埋葬されていた。

玄室左側の人骨は、頭位を入口側にして足位を中央奥部に向けていた（1号人骨、♀）。

玄室中央部の人骨は、頭位を入口側にして足位を中央奥部～やや右側に向けていた（2号人骨、♂）。

玄室右側の人骨は、頭位を奥部にして足位を右壁入口側に向けていた（3号人骨、♀）。

1号人骨

1) 骨の遺残性

遺残骨は骨格順に配列しているが、脊椎骨、胸郭骨が消失して、遺残性はやや不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：ほぼ完形（頭蓋底骨欠）

下頸骨：左下顎体完形、右下顎体は前半下顎体遺残、後半部欠

歯牙：	○ ○	○ ○	△ ○ ○ ○
×	7 6	5 4 × × ×	× × × 4 5 6 7 ×
／	7 6 ∟ 5 4 3 2 ×	1 2 3 4 5 6 7 /	
△ △	△ △ ○ △	△ ○ ○ ○ ○ ○ ○	

脊椎骨 仙椎骨：No 不明椎体1ヶ

上肢骨 上腕骨：左；骨体上部～下端部 右；骨体中央部

尺骨：左；骨体上部～下端部 右；骨体の1部

橈骨：左；骨体の1部

下肢骨	寛骨：左；座骨部欠、他完存	右；座骨部欠、他完存
	大腿骨：左；近位部～骨体下端部	右；ほぼ完形、骨長41.3cm
	脛骨：左；骨体中央部	右；ほぼ完形、骨長33.3cm
	膝蓋骨：右；ほぼ完形	
足骨	足根骨：左；2(距骨、舟状骨)	右；5(踵骨、距骨、舟状骨、立方骨、第1楔状骨)
	指節骨：右；2(中足骨)	

3) 推定性別

頸蓋骨の諸形状、四肢骨は細く、華者で筋付着部の発達が弱い、寛骨の形状等から、本尾骨は女性骨と推定する。

4) 推定年令

頸骨の頸蓋冠縫合の程度、歯牙の咬耗度はプロカーラーの1～2度、口蓋縫合の切歯縫合はほぼ融合し痕跡程度、口蓋骨縫合は下1/2融合から、本尾骨の年令は牡牛後期位と推定する。

5) 推定身長

遺残する下肢骨長から、本尾骨の生前の身長はピアソン法¹⁾で148.5cm、藤井法²⁾で152.4cmである。

6) その他

遺残骨に損傷・骨折・疾患を全く認めない。

本尾の遺残骨は全骨にわたり、ベンガラ様赤色顔料(朱)の付着がみられた。

2 号人骨

1) 骨の遺残性

遺残骨はほぼ骨格順の配列しているが、1号人骨(?)と同様に、脊椎骨、胸郭骨と上肢骨が消失しており、遺残性はやや不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨	頭骨：額面骨、左右の頭頂骨、右側頸骨
	下顎骨：左下顎体(下顎枝欠)と右下顎体
歯牙	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
	8 7 6 5 4 3 2 1 X 2 3 4 5 6 7 X
	／ 7 6 5 4 3 2 X X X 3 4 5 6 7 8
	△ △ △ △ △ △ ○ ○ ○ ○ ○ ○
脊椎骨	腰椎骨：No.4、5の椎体部
	仙椎骨：No.1、2の椎体部
上肢骨	鎖骨：左；骨体
	上腕骨：左；骨体中央部
	橈骨：左；骨体～下端部
手骨	指節骨：左；中手骨3
下肢骨	寛骨：左；ほぼ完形 右；ほぼ完形
	大腿骨：左；ほぼ完形、骨長43.0cm 右；骨体
	膝蓋骨：左；ほぼ完形 右；ほぼ完形

脛骨：左；ほぼ完形、骨長32.5cm 右；ほぼ完形、骨長32.5cm
足骨 是根骨：左；7／7、完存 右；7／7、完存
指節骨：右；中足骨2、末節骨1

3) 推定性別

頭蓋の諸形状、四肢骨は太く粗健で、筋付着部の発達が良好と寛骨の形態から、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

頬蓋冠3縫合の融合の程度、歯牙の咬耗度はブローカーの2～3度、口蓋縫合の切歯縫合は完全融合、口蓋骨融合作りが進行しているので、本屍の年令は壮年後期位と推定する。

5) 推定身長

遺残する下肢骨長から、本屍の生前の身長はビアソン法で161.6cm、藤井法で160.1cmである。

6) その他

遺残骨に損傷・骨折・疾患らの異常を認めない。

3 号 人 骨

1) 骨の遺残性

遺残骨はほぼ骨格順配列に遺残しているが、脊椎骨と胸郭骨らが消失しており、遺残性はやや不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頸蓋骨 頭骨：ほぼ完存（左側頸部欠）

下顎骨：左下顎枝部欠、他完形

歯牙：	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 /
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 /
● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	

脊椎骨 頸椎骨：No.1（寰椎）

腰椎骨：No.4 or 5の椎体骨片

仙椎骨：No.1、2の椎体部

胸郭骨 肋骨：左；6ヶ（No.5～10？）

上肢骨 肩骨：左；胸骨端欠、他完形 右；胸骨端欠、他完形

上腕骨：右；骨体（遠近両端欠）

尺骨：右；骨体（遠近両端欠）

橈骨：左；骨体（遠近両端欠） 右；骨体（遠近両端欠）

手骨 指節骨：左；基節骨（3）、中節骨（1） 右；基節骨（2）

下肢骨 寛骨：左；仙腸関節面、腸骨体、恥骨部 右；仙腸関節面、腸骨体、恥骨部

大腿骨：左；ほぼ完存（遠近両端離開）、骨長33.5cm 右；ほぼ完存（遠近両端離開）、骨長33.0cm

膝蓋骨：左；ほぼ完形 右；ほぼ完形

脛骨：左；骨体中央部 右；ほぼ完形、骨長26.3cm

腓骨：右；骨体上部～下端部

3) 推定性別

遺残骨は全般的に小さく、華者である。頭骨の諸形状と寛骨の形状からして、本屍骨は女性骨と推定する。

4) 推定年令

頭骨の頸蓋縫3縫合は未融合、四肢骨はすべて遠近両端の骨端部未融合離開、頸蓋底部の蝶後頭軟骨結合は未融合と寛骨の乾骨結合面の所見から、本屍の年令は青年期（10代）位が推定される。

5) 推定身長

遺残下肢骨長から、本屍の生前の身長はビアソン法で133.0cm、藤井法で135.0cmである。

6) その他

遺残骨をみる限り、特記事項なし。

まとめ

1号穴の玄室内には、被葬者3体が仰臥伸展位で埋葬されていた。

1号人骨は女性、年令は壯年後期位、身長はビアソン法で148.5cmである。本屍の遺残骨全骨にベンガラ様朱の付着を認めた。

2号人骨は男性、年令は壯年後期位、身長はビアソン法で161.6cmである。

3号人骨は女性、年令は青年期位、身長はビアソン法で133.0cmである。

2号穴

玄室内には、人骨が全域にわたり散在していた。整理の都合上、玄室を左側、中央部、右側の部位に分ける。

玄室左側奥部の人骨を1号人骨、玄室中央部奥部の人骨を2号人骨、玄室右側奥部の人骨を3号人骨とした。

さらに、玄室左側人口側の人骨を4号人骨、玄室中央部の人骨を5号人骨とした。

被葬者5体の遺残性は全般的に不良であった。

1号人骨

1) 骨の遺残性

頭骨片が2片と遊離歯牙4ヶ遺残、遺残性はきわめて不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：前頭部～頭頂部骨、右側頭骨（錐体部）

歯牙：遊離歯牙4ヶ	7 6	E 5
	△ △	△ △

3) 推定性別

遺残骨と歯牙は小児骨で、性別は不詳である。

4) 推定年令

頭骨の骨質はきわめてうすく、頸蓋冠縫合（冠状縫合）は未融合、他の骨が全く遺残していないことから、未熟骨が推定され、歯牙から小児（10才前後）が推定される。

5) 推定身長

遺残骨からは、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

特記すべき事項なし

2 号 人 骨

玄室中央部奥部を頭位にして足位を中央部に向いていた。

1) 骨の遺残性

遺残骨は骨格順配列が乱れており、後世の攢乱もみられた。遺残性は不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨　　歯　牙：遊離歯牙3ヶ

△

1

2 1

△ △

上肢骨　　上腕骨：右；骨体中央部

尺　骨：左；近位部　　右；近位部

橈　骨：右；近位部

胸郭骨　　肋　骨：不明；No.不明骨片

下肢骨　　脛　骨：左；骨体中央部

腓　骨：左；骨体中央部　　右；骨体中央部

足根骨：右；踵骨、距骨、舟状骨

3) 推定性別

遺残骨は全般的に大きく頭健であるので、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

遺残歯牙の咬耗度はプロカーの2度であるので、本屍の年令は恐らく壯年後期（30代）位が推定される。

5) 推定身長

遺残四肢骨が完形ではないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨に特記事項なし。

3 号 人 骨

玄室右側奥部に頭骨と下肢骨が遺残していた。

1) 骨の遺残性

遺残骨は頭骨、下頸骨と大腿骨のみで、遺残性は不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨　　頭　骨：ほぼ完形（頭蓋底骨、側頭骨一部欠）

○

下顎骨：左右の下顎体（左右の下顎枝欠）、脆剝化

歯　牙：

○

○ ○ ○ ○

○

× × 6 × 4 3 2 1

× 7 6 5 4 3 × ×

△ △ △ △ △

× × 3 × × × × /

× × 3 4 5 6 × ×

○ ○ ○ ○

下肢骨 大腿骨：左；骨体中央部 右；骨体中央部

3) 推定性別

頸蓋骨の諸形状と大腿骨の筋附着部の粗面の発達が弱いことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4) 推定年令

頸骨の頸蓋冠縫合は、冠状・矢状縫合がかなり進行しており、口蓋縫合の切歯縫合は完全融合、歯牙の咬耗度はプロマーの2~3度であるので、本屍の年令は壮年後期位が推定される。

5) 推定身長

遺残大腿骨は完形でないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨に特記事項なし。

4号人骨

玄室左側入口側に若干の人骨が遺残していた。

1) 骨の遺残性

遺残骨は頭骨（頭頂骨）片と歯牙のみで、遺残性はきわめて不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：頭頂骨片

歯牙：1ヶ（6）

3) 推定性別

遺残骨からは、性別不詳である。

4) 推定年令

遺残骨が若干で、年令推定するには資料不足である。骨が程んど消失していることから、未熟骨が推察される。

永久歯（6）が萌出していることから、6才以上が推定されるが、咬耗はみられない。本屍の年令は10才前後の小児が推定される。

5) 推定身長

遺残骨からは、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨に特記事項なし。

5号人骨

玄室中央部から玄室中央奥部にかけて、下肢骨のみがみられた。

1) 骨の遺残性

遺残骨は若干で、遺残性は不良である。

2) 遺残骨名とその部位

下肢骨 寛骨：左右不明；腸骨体の一部

大腿骨：左；ほぼ完形、骨長42.0cm

脛骨：右；骨体中央部

3) 推定性別

遺残大腿骨は大きく頑健で筋附着部の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

遺残骨は一応成人域であり、骨の大きさから壮年期位が推定されるが、それ以上の年令区分は不詳である。

5) 推定身長

遺残大脛骨長から、本屍の生前の身長はピアソン法で160.2cm、藤井法で158.6cmである。

6) その他

遺残骨に特記事項なし。

まとめ

2号穴には、被葬者5体が埋葬されていた。

玄室左側奥部の人骨を1号人骨、手前の人骨を4号人骨、玄室中央奥部の人骨を2号人骨、中央部の人骨を5号人骨、玄室右側奥部の人骨を3号人骨とした。

1号人骨は性別不詳、年令は10才前後の小児で身長不詳である。

2号人骨は男性、年令は壮年後期（30代）で身長不詳である。

3号人骨は女性、年令は壮年後期（30代）で身長不詳である。

4号人骨は性別不詳、年令は10才前後の小児で身長不詳である。

5号人骨は男性、年令は壮年期位、身長はピアソン法で160.2cmである。

3号穴

玄室左側中央部に下肢骨が3個遺残していた。遺残骨の位置関係から、被葬者は1体で恐らく玄室左側奥部を頭位にして、左手前に下肢を向けて仰臥仰展位で埋葬されたと推定される。

1) 骨の遺残性

遺残骨は下肢骨（大腿骨と脛骨）のみで、骨の遠近両端を欠き、比較的脆弱であった。

骨の遺残は不良である。

2) 遺残骨名とその部位

下肢骨 大腿骨：左；骨体中央部 右；骨体中央部

脛 骨：右；骨体中央部

3) 推定性別

遺残大腿骨と脛骨は太く骨厚で、筋付着部の粗面の発達も良好であるので、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

遺残下肢骨の大きさは成人域に達しているが、それ以上の年令区分は不詳である。

5) 推定身長

遺残下肢骨はすべて遠近両端を欠き、完形でないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨をみる限り、骨折・疾患らの所見はない。

まとめ

3号穴の玄室左側中央部に下肢骨3個遺残していた。

骨の遺残状況からして、被葬者は1体、成人の男性で身長不詳である。

玄室右側奥部に須恵器があり、骨は完全に消失しているが、恐らく1体が埋葬された可能性が高い。

4号穴

玄室中央部一帯に、人骨が集骨状に遺残しており、長管骨（上・下肢骨）を主体に、頭骨、下頸骨とその他の骨が多数散在していた。

1) 骨の遺残性

長管骨の遠近両端は大半が欠落、骨の遺残性は不良で、左右の別が区別できないものもあった。

後世の攪乱によって、個体識別は不可能であった。

2) 遺残骨名とその部位

遺残骨は多数遺残するが、個体別に識別不能のため、主要骨を中心に個体数（被葬者数）を確認していく。

主要骨の個数、左右別、性別と個体数

骨名	個数	内訳	個体数
頭骨	3	2(♀)、1(小児)	3
下頸骨	3	2(♀)、1(小児)	3
上腕骨	10	右(2)、左(2)、不明(6)	2+α
寛骨	4	右(2)、左(2)	2
大腿骨	10	右(4)、左(5)、不明(1)	5
脛骨	10	右(5)、左(5)	5

被葬者（個体）の数

上記の遺残骨の内訳から、頭骨と下頸骨が3対遺残するので、3体が確認される。

上、下肢骨は10個遺残、大腿骨は右4、左5、不明1と寛骨は右5、左5あることから、5対あるので個体数は5体である。

3) 推定性別

遺残頭骨、下頸骨、寛骨、上・下肢骨の諸形態学的特徴からして、被葬者（個体）の性別は男性1体、女性2体と性別不詳の小児2体である。

4) 推定年令

男性骨は上・下肢骨のみ遺残しているので、骨の大きさ等から、一応成人域と推定される。

女性骨2体（♀1、♀2）で年令推定すると、♀1はM3が左右とも埋伏歯、歯牙の咬耗度は大半がプロカーハード、若干の歯牙で2度であるので、年令は壮年前期位が推定される。

♀2は歯牙の咬耗度はプロカーハード2~3度であることから、年令は壮年後期位が推定される。

小児骨は2体（小児1、小児2）で、小児1の下頸は大きく欠損しているが、遺残歯牙に咬耗が全くみられないことから、年令は10代前半位が推定される。

小児2の長管骨（上・下肢骨）は小児1より小さく、細く、華奢であるので、年令は特定できないが恐らく10才前後位が推察される。

5) 推定身長

男性骨の生前の身長はピアソン法で153.7cm、藤川法で150.6cmである。

女性 2体の内、いずれかの生前の身長はピアソン法で136.9cm、藤川法で137.3cmである。

小児 2体の生前の身長は、いずれも不詳である。

6) その他

本横穴の被葬者 5体の人骨の遺残性は不良で、骨に特記する所見はない。

まとめ

4号穴の玄室中央部に人骨が多数集骨状に遺残していた。

被葬者数は 5体が確認されたが、それ以上の被葬者も思量される。

被葬者の内訳は次の通りである。

男性骨の年令は一応成人域、身長はピアソン法で153.7cmである。

女性は 2体で♀1の年令は壯年前期位、♀2の年令は壯年後期位である。♀1か♀2のいずれかの身長はピアソン法で136.9cmである。

小児骨の場合、性別は不詳で、小児1の年令は10代前半位、小児2の年令は10才前後位である。小児1と2のいずれも身長は不詳である。

5号穴

玄室中央部に大腿骨が 1個遺残していた。

左大腿骨の遠位部が中央奥部に位置しているので、恐らく玄室中央部の入口側に頭位をおき、奥部に向って仰臥伸展位で 1体が埋葬されたと推定される。

1) 骨の遺残性

遺残骨は大腿骨 1個、遠近両端欠け、骨体遠位部の上面のみ遺残、きわめて脆弱化、骨の遺残性はきわめて不良である。

2) 遺残骨名とその部位

下肢骨 大腿骨：左；骨体遠位部上面のみ

3) 推定性別

遺残大腿骨は上面のみで、正半化しているので、形態学的特徴不詳につき、性別は不詳である。

4) 推定年令

遺残大腿骨の大きさから、一応成人域であるが、それ以上の年令区分は不詳である。

5) 推定身長

遺残大腿骨の遠近両端が欠損しているので、骨長不詳につき、木屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨に特記事項なし。

まとめ

5号穴の玄室中央部に大腿骨 1個遺残、骨の遺残性はきわめて不良である。

被葬者は 1体で、性別は不詳、年令は一応成人域、身長は不詳である。

6号穴

羨道と玄室の左側と右側に須恵器の土器が遺残していた。

土器の出土状況から判断すると、玄室左右に被葬者が1体ずつ埋葬されたと推察される。

遺残骨が全くないことから、被葬者は未熟骨の小児か若年者が推定される。

しかし、遺残骨が全くないので、これ以上の記載は割愛したい。

7号穴

玄室右側に箱式石棺があり、やや入口側に石棺の壁をおき、頭位を入口側にして仰臥伸展位で1体が埋葬されていた（1号人骨）。

玄室左側奥部（棺外）に頭位をおき、仰臥伸展位で埋葬されていた。（2号人骨）

1号人骨

石棺内に須恵器の土器を枕にして、仰臥伸展位で埋葬されていた。

1) 骨の遺残性

遺残骨は末梢骨まで遺残して、遺残性はきわめて良好である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頸骨：ほぼ完形（右前頭部～右側頭部欠）

下顎骨：ほぼ完形（左右の下顎枝欠）

歯牙：	△△	○○○○○○○
X X X X X	3 2 X	X 2 3 4 5 6 7 X
X 7 6 5 4 3 2 1	1 1 2 3 4 5 6 7 X	X
O O O O O O O	O O O O O O O	C ₃

脊椎骨 頸椎骨：No.1～7、ほぼ完形

胸椎骨：No.2～12、ほぼ完形

腰椎骨：No.1～5、ほぼ完形

仙椎骨：No.1～5、ほぼ完形

胸部骨 胸骨：胸骨柄・体、ほぼ完形

肋骨：左；No.1～12、ほぼ完形 右；No.1～12、ほぼ完形

上肢骨 鎖骨：左；両側端欠、他完形 右；胸骨端欠、他完形

肩甲骨：左；関節部、棘下窩部を中心に遺残 右；関節部、棘下窩部を中心に遺残

上腕骨：左；ほぼ完形、骨長29.3cm 右；ほぼ完形、骨長29.5cm

尺骨：左；ほぼ完形、骨長24.2cm 右；ほぼ完形、骨長25.0cm

橈骨：左；ほぼ完形、骨長22.3cm 右；ほぼ完形、骨長22.6cm

手骨 手根骨：左；7/8、完存 右；8/8、完存

指節骨：左；9/19、完存 右；13/19、完存

下肢骨 骰骨：左；ほぼ完形（恥骨部欠） 右；ほぼ完形（恥骨部欠）

大腿骨：左；ほぼ完形、骨長41.5cm 右；ほぼ完形、骨長41.7cm

膝盖骨：左；完形 右；完形

脛 骨：左；ほぼ完形、骨長32.5cm 右；完形、骨長32.6cm

腓 骨：左；骨体中央部 右；骨体中央部

足 骨 足根骨：左；7/7、完存 右；7/7、ほぼ完存

指節骨：左；13/19、中足骨、基節骨、中節骨 右；7/19、中足骨、基節骨

3) 推定性別

遺残頭蓋骨の諸形状、四肢骨の大きさと筋付着部の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

本屍頭蓋骨の頭蓋冠縫合の程度、歯牙の咬耗度の程度から、本屍骨の年令は壮年期（30代）が推定される。

5) 推定身長

遺残四肢骨（上腕骨、桡骨、尺骨、大腿骨、脛骨）長から、ビアソン法で平均157.8cm、藤井法で平均156.7cmである。

6) その他

本屍の遺残骨を見る限り、損傷・骨折・疾患の痕跡を認めない。

本屍の上半身骨（上腕骨と肩甲骨）に朱付着。

2 号 人 骨

玄室左侧最奥部に頸位をおき、伸展位で埋葬されていた。

1) 骨の遺残性

遺残骨はほぼ骨格順に遺残しているが、本屍骨は未熟骨で、骨の両端が未融合のため、脆弱化なしし消失している。しかし、遺残性はかなり良好である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭 骨：左右の側頭骨、後頭骨、頭蓋底骨、上顎骨

下顎骨：ほぼ完形（左下顎枝欠）

歯 牙：

● ○ ○ ○ ○ ○ ○ △	△ △ △ △ △ △ △
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 /
8 7 6 5 4 3 × ×	1 2 3 × 5 6 7 8
● ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ●

脊椎骨 頸椎骨：No.2～7、ほぼ完存

胸椎骨：No.1～12、ほぼ完存

腰椎骨：No.1～5、ほぼ完存（脆弱化）

仙椎骨：No.1～5、ほぼ完存

胸郭骨 肋 骨：左；No.1、3～12 右；No.1、3～12

上肢骨 鎖 骨：左；ほぼ完存、約12.0cm 右；ほぼ完存、約12.0cm

肩甲骨：左；関節部、棘下窩部 右；関節部、棘下窩部

上腕骨：左；骨体上部～下端部 右；ほぼ完形、骨長25.6cm

尺 骨：左；近位部～骨体中央部 右；近位部～骨体下部

桡 骨	左；骨体中央部	右；近位部～骨体下部
手 骨	指節骨：右；3／19（中手骨、3）	
下肢骨	寛 骨：左；ほぼ完存	右；ほぼ完存
	大腿骨：左；ほぼ完形、骨長37.0cm	右；ほぼ完形、骨長36.5cm
	脛 骨：左；ほぼ完形、骨長29.7cm	右；ほぼ完形、骨長29.5cm
	腓 骨：左；骨体中央部	右；骨体中央部
足 骨	足根骨：左；7／7、完存	右；7／7、完存
	指節骨：左；4／19（中足骨4）	右；5／19（中足骨4、基節骨1）

3) 推定性別

遺残骨は全般的に細く、華奢であり、寛骨の形状から、本屍骨は女性骨と推定する。

4) 推定年令

本屍の四肢骨の遠近両端の骨端はすべて未融合で、未熟骨であり、未成年者（20才以下）である。

寛骨の恥骨結合面の所見も10代の所見である。

歯牙の萌出みると、上下顎の第3大臼歯（M₃）が未萌出（埋伏歯）の状態である。

本歯牙の萌出は17、18～25才位までに萌出すると云われている。

以上の所見から、本屍骨の年令は青年期（10代後半）位と推定される。

5) 推定身長

遺残四肢骨長から、本屍の生前の身長はピアソン法で140.6cm、藤井法で143.0cmである。

6) その他

本屍の遺残骨をみる限り、損傷・骨折・疾患の痕跡を認めない。

まとめ

7号穴には被葬者2体（♂、♀）が埋葬されていた。

玄室右側に箱式石棺があり、内に1体が埋葬されていた（1号人骨、♂）。

玄室左側奥部にもう1体が埋葬されていた（2号人骨、♀）。

1号人骨は男性、年令は壮年期、身長はピアソン法で157.8cmである。本屍骨の上肢部に朱の付着がみられた。

2号人骨は女性、年令は青年期（10代後半）位、身長はピアソン法で140.6cmである。

8 号 穴

玄室左側奥部から左側壁に沿って手前の方に向って人骨若干と歯牙8ヶが遺残していた。

玄室左側の遺残骨と歯牙から、被葬者1体が確認された。中央部と右側に須恵器が遺残、被葬者が埋葬された思量されるが、骨の遺残を認めない。

1) 骨の遺残性

遺残骨は、頭骨、頸椎骨、上腕骨と大腿骨の4個と歯牙8ヶで、完形骨はなく遺残性はきわめて不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨　　頭 骨：前頭部、頭頂部、後頭部、左右の側頭骨と上顎骨

歯 牙：遺残歯牙 8 ヶ	△		△ △ △	△ △
	7		2 3 4	7 8
	6 4			
	△ △			

- 脊椎骨 頸椎骨：Na不明の横突起（横突孔）部
 上肢骨 上腕骨：左右不明；骨体の1部（骨片化）
 下肢骨 大腿骨：左；骨体中央部

3) 推定性別

遺残頭骨の諸形態学的形状と上、下肢骨が細く、華奢であることから、本屍骨は女性骨と推定する。

4) 推定年令

頬蓋冠縫合の冠状・矢状縫合はほぼ融合、人字縫合は未融合

II蓋縫合の切歯縫合は完全融合

歯牙の咬耗度はプロカーの2～3度

以上から、本屍の年令は廿年後期～熟年位が推定される。

5) 推定身長

遺残四肢骨が完形でないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨をみる限り、損傷・骨折・疾患の所見は認めない。

遺残頭骨に朱付着、その周辺部の屍床部にも朱付着。

遺残骨は遺残性不良であるが、人為的な後世の搅乱がみられた。

玄室左側に入骨が1体確認されたが、玄室中央部と右側奥部に須恵器が遺残することから、被葬者はさらに1～2体あったと推察される。

まとめ

8号穴の玄室左側中央部～奥部にかけて、遺残性不良の人骨（1体）が散在していた。

被葬者は女性、年令は廿年後期～熟年位、身長は不詳である。

本屍の遺残骨は散在しており、後世の搅乱がみられた。

玄室中央部と右側の奥部に須恵器の土器が遺残するが、人骨の遺残を認めない。

状況から判断すると、恐らく被葬者がさらに2体埋葬されたと推察された。

9号穴

玄室内には被葬者が2体埋葬されており、右側壁沿いに1体（1号人骨）と左側壁沿いの1体（2号人骨）である。

1号人骨は頭位を玄室入口側におき、右側壁沿いに仰臥伸展位で埋葬されていた。

2号人骨は頭位を玄室左側入口側におき、左側壁沿いの奥に向って仰臥伸展位で埋葬されていた。

1号人骨

1) 骨の遺残性

遺残骨は頭骨（骨片化）、上肢骨と下肢骨が確認されたが、骨の遺残性は不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：頭頂部、左右の側頭部（錐体部）、上頸骨

下顎骨：左右の下顎体

歯牙：

○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
$\times \times 6 5 4 \overline{J} \times \times \times \times$		$J 2 3 4 5 6 7 8$
8 7 . 6 5 4 3 $\overline{J} \times \times$		$\times \times \times J 4 5 6 \times 8$

○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○

上肢骨 上腕骨：右；骨体（骨片化）

下肢骨 股骨：左；脛骨の一部

大腿骨：左；骨体中央部 右；骨体中央部

脛骨：左；骨体（骨片化） 右；骨体（骨片化）

3) 推定性別

遺残大腿骨は太く頑健で、筋付着部の粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

遺残歯牙の咬合度はプロターの2度と上下顎の第3大臼歯が萌出していることから、本屍の年令は壮年期位が推定される。

5) 推定身長

遺残四肢骨に完形骨がないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨をみる限り、損傷・骨折・疾患の痕跡なし。

右上腕骨の骨体に朱（ベンガラ）付着を認めた。

2号人骨

1) 骨の遺残性

遺残骨は頭骨の一部と遊離歯牙15ヶのみで、遺残性はきわめて不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：左右の側頭部（錐体部）、頭骨片若干

歯牙：遊離歯牙15ヶ

△	△	△	△	△		△	△	△
8	6	5	4	3		4	5	7
6		3	2	1		E	5	
△		△	△	△		△	△	

3) 推定性別

本屍骨は小児の頭骨片と歯牙であるので、性別は不詳である。

4) 推定年令

遺残歯牙をみると、下顎第2乳臼歯（ \overline{E} ）があり、上、下顎の永久歯の第1大臼歯（ 1M 、 $_M$ ）が萌出、上顎の第1小臼歯と第2小臼歯（ P^1 、 P^2 ）、下顎の第2小白歯（ P_2 ）、上顎の第2大臼歯（ M^2 ）と第3大臼歯（ 3M ）の歯根の形成がなく、未萌出であるので、本屍の年令は10才前後位が推定される。

5) 推定身長

遺残骨に完形の四肢骨がないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨に特記事項なし。

1号人骨（♂）の頭骨下の屍床に朱、上腕骨骨体に朱付着。

まとめ

9号穴の玄室の左右に被葬者が1体ずつが埋葬されていた。

2体の被葬者とも、骨の遺残性は不良であった。

1号人骨（玄室右側）は男性、年令は壮年期位、身長は不詳である。

2号人骨（玄室左側）は性別不詳の小児、年令は10才前後位で身長は不詳である。

1号人骨の頭骨と上腕骨に朱の付着を認めた。

10号穴

玄室左侧手前に頭骨片と遊離歯牙14ヶ、左侧奥部に足骨片が遺残していた。

玄室左侧手前に頭位をおき、左侧奥部に向けて仰臥伸展位で1体が埋葬されていた。

1) 骨の遺残性

遺残骨は頭骨片、歯牙と足骨片のみで、遺残性は不良である。

2) 遺残骨名とその部位

頭蓋骨 頭骨：左右の側頭骨（錐体部のみ）、右上顎骨の一部（87）

歯牙：遊離歯牙14ヶ

△△ △△△

△△△△

8 7 II 6 / 4 3 // / / / / 4 / 6 7 8

/ 7 6 / 4 // / / / / / / / / 6 7 /

△△ △△ △△

足骨 中足骨：左右不明；骨片

3) 推定性別

遺残骨に性的特徴を示す部位がない。

遺残歯牙の歯冠径は、全般的に大きいことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4) 推定年令

遺残歯牙の萌出状態から成人域、歯牙の咬耗度はプロカーラーの2～3度であるので、本屍骨の年令は壮年後期位が推定される。

5) 推定身長

遺残骨からは、本屍の生前の身長は不詳である。

6) その他

遺残骨に特記事項なし。

まとめ

10号穴には、遺残性不良の被葬者1体が埋葬されていた。
被葬者は男性、年令は壮年後期位で身長不詳である。

11号穴

11号穴は、A区6号穴の西約9mに位置し、東西1.4m、奥側幅0.35m、前側幅0.60mの長方形プランで、高さ0.7mで横断面はドーム状を呈する。

本横穴は、他の横穴墓のすべてにみられた墓道に相当するものがなく、遺構からは遺物が全く検出されなかった。玄室は靴形削成されていないく、埋葬施設としては考えがたい。祭祀用（？）の横穴と思量する。

考察

出土人骨の遺残性は、遺体の安置された環境（とくに土質）に大きく左右される。

一般的に、乾燥性（排水）のよい土質や砂地では、骨の遺残性がよく、粘土質や酸性土質では極端に骨の遺残性が悪い。

島根県の雲南地方の横田町³¹⁾仁多町^{43) 53) 63) 72) 81)}の横穴墓からの出土人骨は、他地方に比較すると、一般的に骨の遺残性はきわめて良好で、未梢骨まで遺残していることが多い。これは、土質が前者に属していることによる。

しかし、今回の横田町小池奥横穴群の出土人骨の遺残性は、横穴によってかなりの差がみられ、良好なものからきわめて不良のものまであった。

1号穴：3体が良好な状態で遺残していた。

2号穴：5体が確認されたが、遺残性は全般的に不良であった。さらにもう1体の埋葬が推察された。

3号穴：1体が検出されたが、遺残性不良であった。玄室右側に須恵器が検出され、ここにもう1体埋葬されたと推察されたが、骨は完全に消失していた。

4号穴：玄室中央部に集骨状に5体が検出されたが、遺残性は不良であった。

5号穴：玄室中央部に骨1ヶ遺残、遺残性きわめて不良で1体が検出されたが、さらにもう1体が埋葬されたと推察されたが、骨は完全に消失していた。

6号穴：玄室左右に須恵器が遺残、被葬者は少なくとも2体が埋葬されたと思量できるが、骨の遺残を全く認めなかつた。被葬者は未成年で、未熟骨であったのかも知れない。

7号穴：箱式石棺内に1体、その周囲にもう1体が検出され、骨の遺残性はきわめて良好であった。

8号穴：須恵器の遺残状況から、少なくとも4～5体の埋葬されたと思量されたが、かろうじて、1体検出され、遺残性はきわめて不良であった。

9号穴：遺残性不良の人骨が2体検出されたが、さらに1～2体の埋葬があったと思量された。

10号穴：遺残性不良の人骨が1体検出された。

11号穴：墓穴ではなく、祭祀用の穴の可能性が高い。

以上から、本横穴群（1～10号穴）からの出土人骨総数は21体が確認されたが、さらに10体前後の被葬者があったと推察できる。消失したと思量される人骨が、すべて未熟骨（小児骨）であったのかどうかも、不詳である。

今後の課題として、消失したと思量される部位（屍床）の土砂を分析して、埋葬の事実があったかどうか、検証する必要がある。

要 約

島根県横田町所在の小池奥横穴墓群は11横穴から成り、その内人骨が出土したのは9横穴であった。本横穴墓群出土人骨の遺残性が良好であったのは3穴（1、2、7号穴）で、残りの6穴（3～6、8～10号穴）は全般的に不良であった。11号穴は祭祀跡と推察された。

確認できた總被葬者数は21体で、内訳は男性8体、女性7体、小児5体と性別不明1体であった。被葬者の年令構成をみると、男性では壯年後期2体、壯年期4体と年令不詳の成人域2体であった。女性では壯年後期4体、壯年前期1体と青年期2体であった。小児では10代前半1体、10才前後4体であった。性別不明者では年令不詳の成人域1体であった。

出土人骨の内、身長推定できたのは、21体中8体にとどまった。

出土人骨がない横穴（6号穴）、また横穴の遺物の配置状況から、確認された人骨の他に、人骨の消失した可能性が示唆された横穴（2、3、5、8、9号穴）もかなりあったことから、本横穴墓群の總被葬者数は確認された21体の他に、さらに10体前後上まわることが推察された。

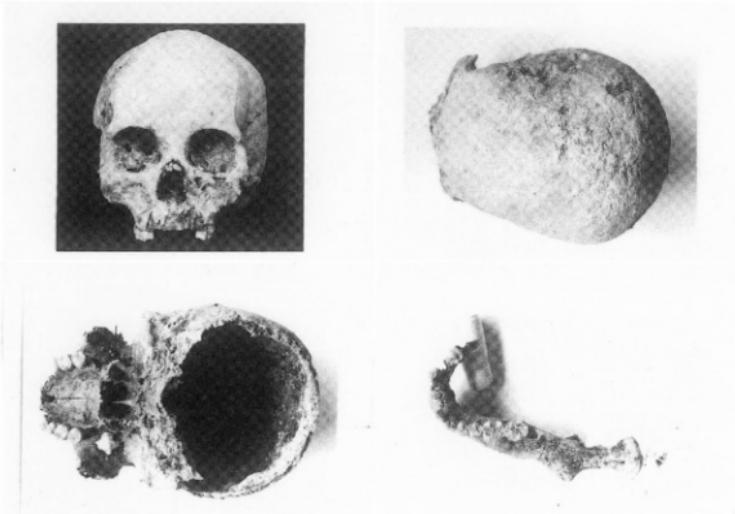
文 献

1. Pearson, K. (1899) : Mathematical contributions to the theory of evolution, V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc. London. ser. A., 192, 169-244.
2. 藤井 明 (1960) : 四肢長骨の長さと身長との関係に就いて。順天堂大保健体育紀、3, 49-61.
3. 井上晃孝 (1994) : 横田町宮ノ森横穴墓出土人骨について、角・宮ノ森横穴・柏原遺跡発掘調査報告書、14-25、島根県横田町教育委員会
4. 井上晃孝 (1984) : 上分中山1号横穴墓内の人骨鑑定、上分中山横穴群調査報告書、島根県仁多町教育委員会
5. 井上晃孝 (1986) : 比久尼原横穴群の人骨鑑定、比久尼原横穴群緊急発掘調査報告書、13-19、島根県仁多町教育委員会
6. 井上晃孝 (1991) : 川子原横穴墓の人骨について、島根県埋蔵文化財調査報告書第XVII集、43-52、島根県教育委員会
7. 井上晃孝 (1992) : コフケ横穴出土人骨の概要、島根県埋蔵文化財調査報告書第XVIII集、21-26、島根県教育委員会
8. 井上晃孝 (1996) : 玄蔵坊横穴出土人骨、仁多町玄蔵坊横穴発掘調査概報、島根県仁多町教育委員会

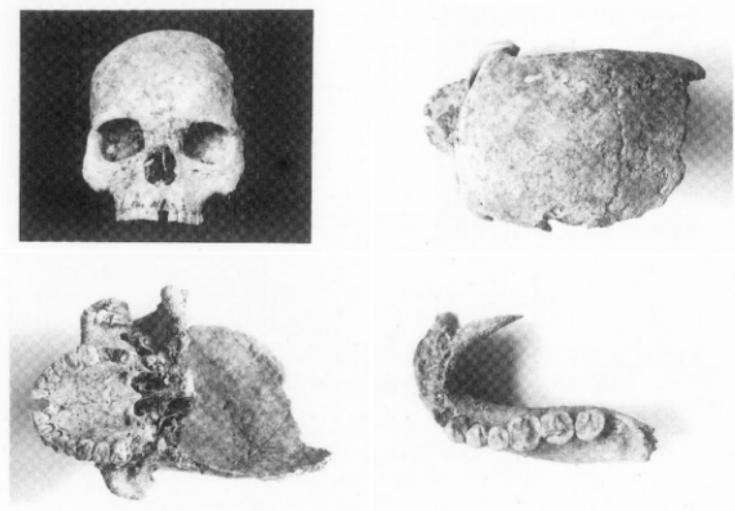
横穴 (No.)	被葬者数	推定性別			推定年令	推定身長 (ピアソン法による)	備考
		男	女	小兒			
1号穴	3	1	2		1号(♀)：壯年後期 2号(♂)：壯年後期 3号(♀)：青年期	1号(♀)：148.5cm 2号(♂)：161.6cm 3号(♀)：133.0cm	1号(♀)：全骨に朱
2号穴	5	2	1	2	1号(小兒)：10才前後 2号(♂)：壯年後期 3号(♀)：壯年後期 4号(小兒)：10才前後 5号(♂)：壯年期	1号(小兒)：不詳 2号(♂)：不詳 3号(♀)：不詳 4号(小兒)：不詳 5号(♂)：160.2cm	3号(♀)：頸骨に朱
3号穴	1	1			♂：成人域	♂：不詳	
4号穴	5	1	2	2	♂：成人域 ♀1：壯年前期 ♀2：壯年後期 小兒1：10代前半 小兒2：10才前後	♂：153.7cm ♀1か♀2のいづれか： 136.9cm 小兒1, 2：不詳	
5号穴	1			1	成人域	不詳	
6号穴	消失						
7号穴	2	1	1		1号(♂)：壯年期 2号(♀)：青年期	1号(♂)：157.8cm 2号(♀)：140.6cm	1号(♂)：上半身に朱
8号穴	1		1		♀：壯年後期～熟年前期	♀：不詳	頸骨に朱
9号穴	2	1		1	1号(♂)：壯年期 2号(小兒)：10才前後	1号(♂)：不詳 2号(小兒)：不詳	1号(♂)：頭骨下の砂に朱、上腕骨に朱
10号穴	1	1			♂：壯年後期	♂：不詳	
11号穴	祭祀跡						
	21	8	7	5	1		

【付表】 横田町小池奥横穴出土人骨一覧

小池奥横穴群

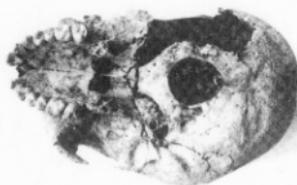


1号穴 1号人骨：(♀)



1号穴 2号人骨：(♂)

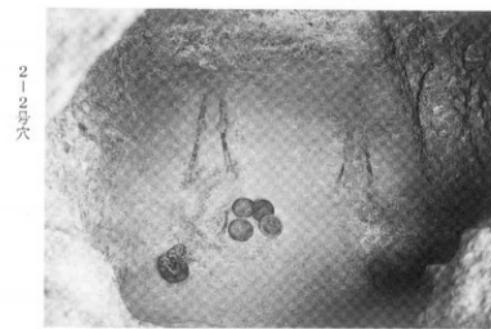
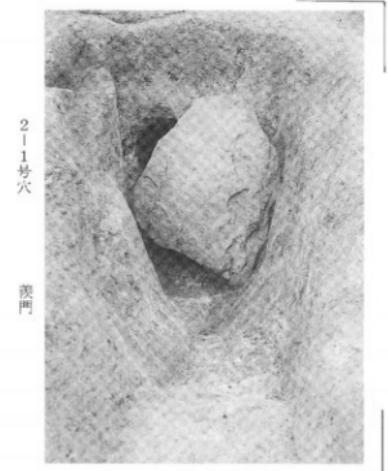
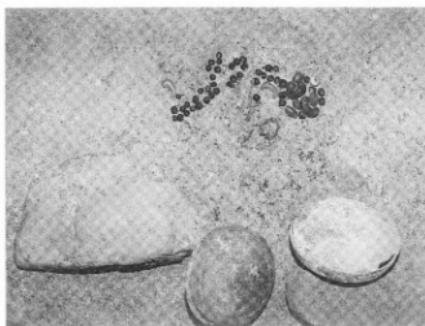
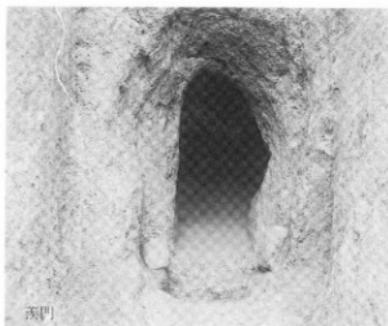
小池奥横穴群



1号穴 3号人骨：(♀)

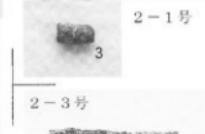


7号穴 1号人骨：(♂)



PL2

1 - 1 号



2 - 3 号

1

2 - 2 号

1
3
4

26
25

小池横穴群出土遗物

小池奥横穴群

背景
(1~6号)



4号穴



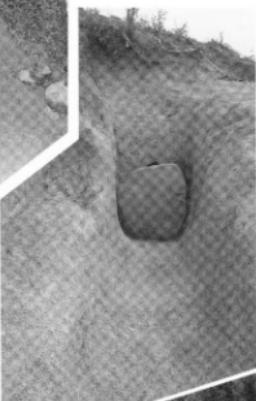
2号穴



小池奥横穴群



5号穴



6号穴



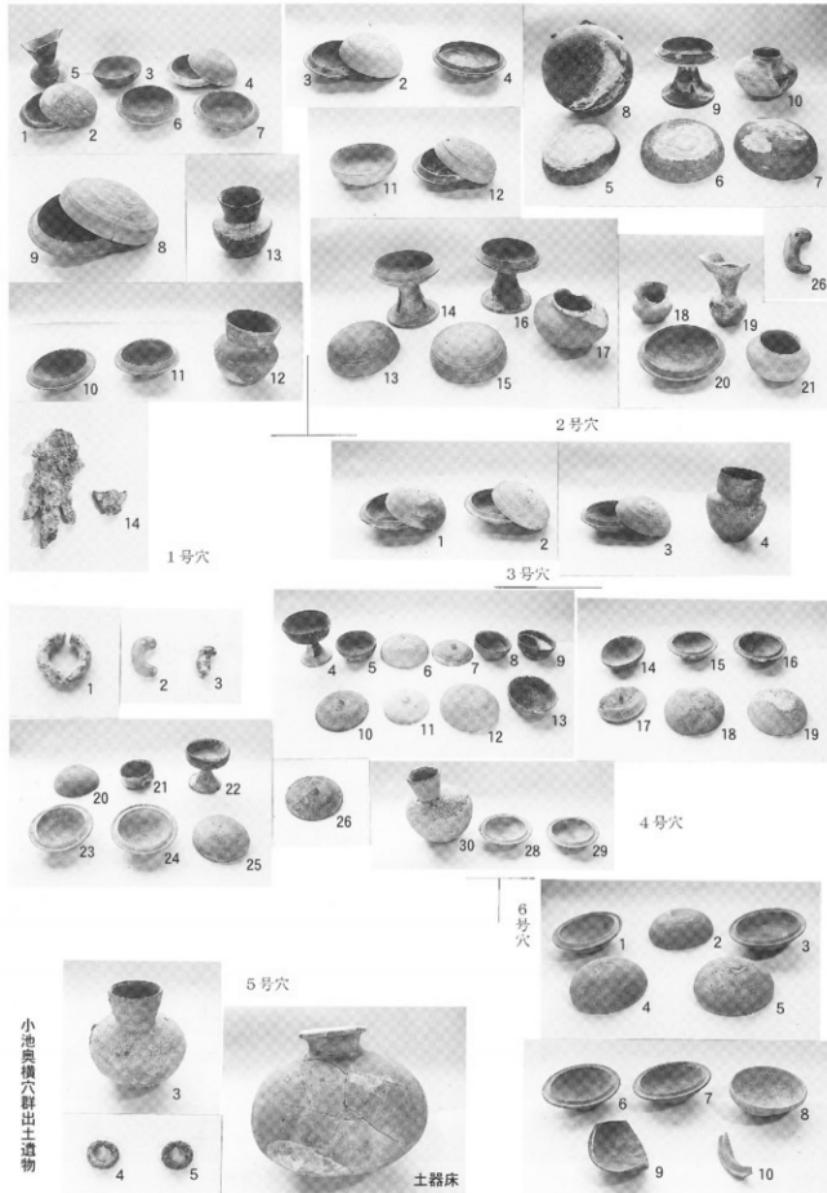
7号穴



8号穴



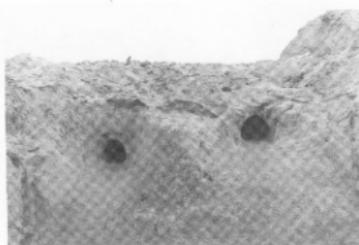
9号穴





小池奥横穴群出土遗物

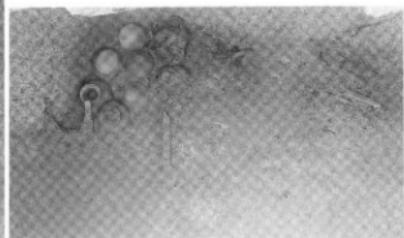
天狗松横穴群



4号·3号 溝門



5号穴



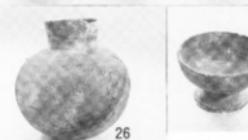
天狗松横穴群出土遗物



2号穴



菩道

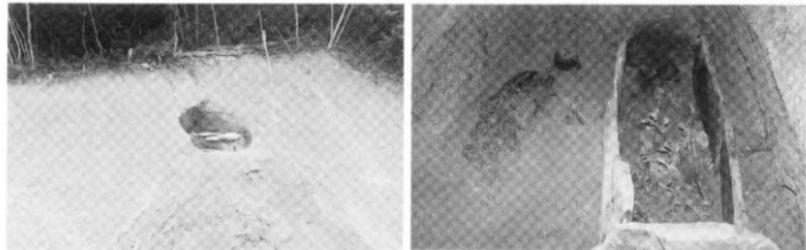


菩道

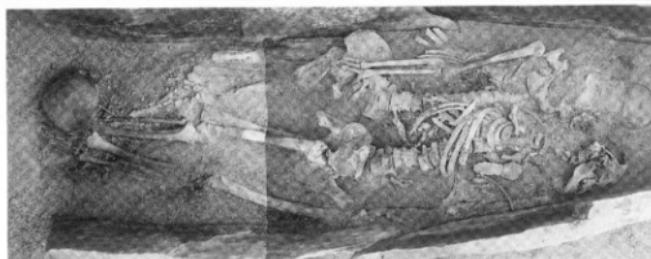


3号穴





滝ノ谷尻横穴



報告書抄録

ふりがな	またいごこおうけつぼ こいけおうけつぐん こikeおくおうけつぐん てんぐまつおうけつぐん たきのたにじりおうけつ						
書名	マタイ廻横穴墓 小池横穴群 小池奥横穴群 天狗松横穴群 滝ノ谷尻横穴						
副書名	諸工事に関わる横穴墓調査						
編集者	杉原清、藤原友子						
編集機関	夷山雲町教育委員会						
所在地	〒699-1832 島根県仁多郡夷山雲町横田1037番地 Tel 0854 52 2680						
発行年月日	西暦2010年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
マタイ廻横穴墓	島根県仁多郡 夷山雲町	32343	N151	35° 13' 09"	133° 04' 10"	2006.11	採土工事
小池横穴群			M57	35° 11' 18"	133° 06' 25"	1990	農地造成
小池奥横穴群			M142	35° 11' 22"	133° 06' 18"	1989	農地造成
天狗松横穴群			M13	35° 10' 43"	133° 05' 05"	1987・1989	農地造成
滝ノ谷尻横穴			M146	35° 09' 28"	133° 05' 52"	1989	林道新設
所収遺跡名			種別	主な時代	主な遺構	遺物	特記事項
マタイ廻横穴墓	横穴墓	古墳時代後期	横穴墓1穴	須恵器壺壺(1対) 2点 人骨3体	複数葬		
小池横穴群			横穴4穴	玉類	後背墳丘・箱式石棺あり		
小池奥横穴群			横穴2群10穴	玉類	複数葬・箱式石棺あり		
天狗松横穴群			横穴3群計6穴	鍔先 大刀 玉類	複数葬・箱式石棺あり		
滝ノ谷尻横穴			横穴墓1穴		箱式石棺・複数葬		

マタイ廻横穴墓 小池横穴群 小池奥横穴群

天狗松横穴群 滝ノ谷尻横穴

諸工事に關わる横穴墓調査

2010年3月

発行 奥出雲町教育委員会
〒699-1832 島根県仁多郡奥出雲町横田1037番地
Tel 0854-52-2680

印刷 (有)木次印刷
〒690-2403 島根県雲南市三刀屋町1635

